勇者の妹と温和な兄

とんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者の妹と温和な兄

【Ｎコード】
Ｎ８５４１Ｗ

【作者名】
とんび

【あらすじ】
兄と妹の二人は異世界に召喚されてしまった。
魔王を倒してほしいとのことだが・・・

※兄は最初から強いです、ハーレム、ご都合主義が多々あります。
苦手という方はご遠慮ください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿になりますゆえ、誤字脱字等があるとおもいます。
そのときは、遠慮なくもうしつけください。

プロローグ

「お兄ちゃん外にでかけようよ〜〜！」

そんな声が、どこからか聞こえてきた。僕の名前は、三城（みしろ）　秀太（しゅうた）１７歳で高校生だ。

ドタドタと階段をのぼる音が聞こえ、バンッ！！と扉が開いた。

「お兄ちゃん今日くらい外に出かけようよ〜」と声をかけてきたのは、僕の妹、麻衣（まい）だ。

絶世の美少女で誰もが振り向く。俺とは、違う人だ。

ちなみに麻衣は１６歳で俺より一つ下だ。

「なんで〜？今日は昼寝の日だからいきたくないな〜」と僕は言った。

「いつもお昼寝してるでしょ！今日はお兄ちゃんの誕生日だから、いいでしょ今日くらい…」と少し困り顔でいってくる。

「…わかったよ〜」といいながら着替えをしようとすると、

「お兄ちゃん、女の人が居る時は着替えちゃダメでしょ」と怒られる。

「家族だからいいと思うけど…」と言うと

「家族でもダメ！」と胸のまえでビシッっとバツ印をつくる。

「わかった、んじゃ先に行ってて～」と僕が言うと

「じゃあ、玄関で待ってるね～」と笑顔で答えて出ていった。

俺はため息をつきながら、着替えをする。正直、麻衣とは出かけたくない。いろんな人に絡まれるのだ。

ヤンキー、いけ好かないナンパ野郎、美人な女の人、高校生など色んな人に…正直うんざりだ。

そうなるなら、家でラノベや音楽を聴いたり、昼寝をしていたほうが、絶対いい。

そう考えながら、部屋を出て玄関に行くと、麻衣が箱に包まれたモノを差し出してきた。

「お誕生日おめでとう、お兄ちゃん」と笑顔でいってきた。

「あ～、うん、ありがとう」と受け取った。

「あけていい？」と聞くと

「いいよ～」と言うのであけた。

箱の中身は黒のブレスレッドだった。

「お兄ちゃんは黒が似合うでしょだからそれにしたの」と言いながら俺を見る。

「まぁ、黒好きだし服はほとんど黒色ばっかだしな～」と苦笑いで自分を見る。

秀太の格好は黒をベースとした服装だ。黒のズボン、Tシャツ、上着、ひとつだけ違うと言えばベルトが白だ。

「アクセサリーが欲しいなと思っていたところだったんだ～。今日はこれつけて出かけるね～」と言うと

「ほんと!?気にいってくれたの?ありがとう!!」と俺に飛びつく。

「重いよ～」と困りながら言うと

「女の人に重いっていうのダメ!重くてもそこは軽く受け止めて、「軽いね」って言ってあげる!!」と憤慨しながら言ってくる。

「わかった。今度からそうするよ」と欠伸しながら言う。

「もうっ!じゃあ、早速行こう～!」と俺の手を引きながら玄関を一緒に出た瞬間、光に包まれた。

1話　異世界にきた

三城　麻衣　視点

「あれ？ここはどこだろう？」私は思ったことをそのまま言ってみた。

「日本ではなさそうだな～」とのんきにお兄ちゃんは言う。
私たちがいたのは、洞窟だった。壁にあるたいまつがあたりを照らしていた。

「あなたちが、勇者ですね！」と声がする。
振り返ると、そこには、綺麗な金髪と碧眼で巫女の服を着た美少女がいた。

「初めまして、私はスフィード王国第一王女、レイ＝スフィードと申します。あなたちには、魔王を倒してもらいたいのです」と唐突に言ってきた。

「勇者？僕たちが？」と首をかしげながらお兄ちゃんは言った

「ははは、はい、そ、そうです。でも、あにゃ、たには【魔力】を感じま、しぇんね」と顔を赤くして王女様は噛みながらで言う。

私は王女様の反応を見て惚れたかな、と思った。ウチのお兄ちゃんは顔立ちが良すぎるのだ。
しかもタチが悪いことに自覚がない。二人で街を歩くと注目を浴び

るのだ。
お兄ちゃんはそれを私のせいにしているが、実際、お兄ちゃんも悪い。
それでさらに、どこかが抜けている。

「【魔力】？それって何ですか？」と私が首をかしげて言うと
「おおっ！！あなたには凄い【魔力】を感じます！あなたが勇者なのですね！」と私の言葉を無視して少し興奮しながら言ってきた。
「えっと、レイ王女様あの～勇者とはなんですですか説明してもらわないと……」と少し困ったふうに言うと
「も、申し訳ございません。…えーと、勇者様、魔王と言うのはこのイヴァードの世界を滅ぼそうとする邪悪な存在です」と言う。
「あ、私の名前は三城　麻衣です。麻衣とお呼びください」と私は言った。
「僕の名前は三城　秀太。秀太と呼んでいいよ」と無敵スマイルで言う。
「うっ！…わ、わかりました。私のこともレイでいいですわ。シュ…シュウタ、マイ」と顔を赤くしながら言ってきた。
「レイ様、馬車の準備が出来たので二人を連れて行きましょう」と騎士の服を着たショートカットの赤髪で碧眼美女が言ってきた。

「レイ、その人は??」とお兄ちゃんが言うと

「あ、はいこの人は、私の側近で魔法騎士団隊長シャーサル＝アースレイドです」と言う。

「魔法騎士団隊長シャーサル＝アースレイです。シャルで構いません」と私たちに一礼する。

「私は三城　麻衣です。麻衣とお呼びくださいシャル」

「僕は三城　秀太。　秀太でいいよ～シャル。そういえば、魔法キシダンってことは、魔法がつかえるの!?」

「あ、はい使えますが…」とシャル言った。…おお!!お兄ちゃんの攻撃が効いてない

「見せてくれない?」

「…し、しかし今から「シュウ私が見せてあげます」」とレイが突然言ってきた。

…我慢しきれず言った感じだった。

「レ、レイ様あまり時間がないのでは??」と少し不満顔で言うと

「問題ありません!」ときっぱり言った。

「シュウタ今から、魔法を出しますね」とうれしそうにお兄ちゃんを見ると

「うん!」と笑顔一杯にお兄ちゃんは頷く。

「でで、では、いきましゅ！」と動揺しながら魔法を放つ

【火よその姿を変え、我に力を貸したまえ、いでよ火炎玉（ファイアーボール）】

ボウッ！　ドッカッーーン！

という音を立てて馬車が燃えた。

「レ、レ、レイ様！！」とシャルは驚愕して言った。

「す、すみません、方向を間違えました」とレイは恐縮しながら言った。

まぁあからさまに動揺してたからなーと思いながらシャルに尋ねる。

「えーと、どうします？」

「とりあえず…歩きましょう申し訳ない」と頭を下げるシャル。

「いえ、うちの兄もあんなことをいったので…こちらにも負があります」と言いながらお兄ちゃんを睨む。

「えっ？僕が悪いの？」

「シュ、シュウタは悪くありません。すべての責任は私にあります！」とお兄ちゃんのためならなんでもという感じでレイは言った。

はぁ～とシャルがため息をついて

「お城までは近いので大丈夫です。では行きましょうか」

こうして私たちは城に向かって歩きだした。

三城　秀太　視点

城につくと、僕たちは部屋に案内された。王様に会うために着替えをするとのこと一度、麻衣とは別れて着替えることにした。
「わ～！黒の装備だ～！それにローブとブーツもー！」僕は素直に喜んだ。

着ている服を脱ぎ早速着て鏡の前に立った。…冒険者になっていた。
「これで旅に出るのか～…でも気になることをレイは言っていたな～」

レイは僕には【魔力】がないと言っていた。後で聞いてみたところ普通の人のなかには【魔力】があり個人差はあるが、誰でもあるものとのこと。
【魔力】があれば空気中の精霊や粒子を媒介して魔法が使えて【魔力】は魔法を使えば消費をし、休んだら回復する。
あと、魔法には精霊魔法と創造魔法がある。精霊魔法は安定しているけど使える魔法が固定される。創造魔法は自分で創れて使い勝手がいいが魔法の制御が安定しないことが多い。
この国では魔法を創れる人が、一人もいないらしい…

なのでこの国の人は精霊魔法を使うとのこと。…余談だが一般の人は一つ精霊が操れば良いほうで、二つ使えると国の宮廷魔法師に選ばれるとのこと。
ちなみにレイは火と水が操れるらしい
なんとか使える方法ないの？とレイに聞いたが彼女は無言だった…
ようするに、僕は、魔法が使えない。落ち込んだ死ぬほど…麻衣とレイが慰めてくれた。…感謝します。
コンコンと音がしたので、はーいと言いながら出ると、可愛らしい自分と同じ年くらいのメイドさんが立っていた。
「初めまして、シュウ様あなたに務めさせていただくメディア＝クレイアと申します」と笑顔で言ってきた。
「初めまして、メディアさん三城　秀太です。秀太でいいよ～後、敬語もなしで～」と笑顔で軽く言うと、
「ッ！！い、いえ私はメイドの身でありましてそのような無礼な行為は…」と何故か顔を赤くしながら言ってきた。
「いやいや、そんなの気にしなくていいんだよ？僕、ここに来たばっかりだから、色々教えてね～～」と笑顔で握手した。
「ッ！！エッ！あの…よ、よ、よろひぃくシュウタ私もメディアでいいかりゃ…」と顔がリンゴみたいで真っ赤だった。…マズイ
「あ～ごめんね不謹慎だよね。女の人の手に触るなんて」と少し反省しながら言うと

「ッッ！！！ひゃ、そんなことないでひゅーーー！！！」と言いながら自分に突進してきた。

「おわっ！っと危ない危ないあ～やっぱり怒ってたんだ…」と心の奥底から反省した。

「みゃう！！あ…も…うダメ」と自分の胸の中で気絶してしまった。するとドアから、

「おにーちゃーん、どうどう？私の白の…って、ええっ！？」と素っ頓狂な声を麻衣があげた。

「お兄ちゃんの胸の中で女の子が…お兄ちゃんまたやったの？」と呆れていた。

「おっ！やっぱり麻衣は白が似合うね」

麻衣は喜んで「ホントに！？ありがとう…じゃなくて、どうしたのその子？」

「いきなり突進してきて腕の中で気絶したんだ…そんなに握手が嫌だったのかな？」はぁ～～っとため息をついた。

「まぁとりあえずベットに寝かして置けば？」と言ってきた。

「そうだね、んじゃ」と言ってメディアをベットで寝かせた瞬間

「準備できましたか？ではこれから…シュウ？」とレイが綺麗なドレスを着て呆然としていた。

「どうしたんだい？」と首をかしげる

「シュ、シュウ！！いきなりメイドをお、お、押し倒すなどいけません！！」と剣幕顔で言って僕をベットから引きはがす。

「そ、そ、そんなにしたいのであればわた「いけませんレイ様！」」とレイの後ろからセリナが言ってきた。

「あっ！シャル来てたんだ。」僕がそう言うと

「ええ、私は彼女の側近でもあるし…レイ様あなたは皇女なのです。もう少し相応な態度を…」とレイに言う。

「わかりましたわ、それでは行きましょうか」と何事もなかったのように言ってきた。

シャルは、はぁ～と息を吐きながらついて行く。僕たちも後に続いた。…シャル大変だなと同情した。

1話　異世界にきた（後書き）

１０／１　魔法の詠唱と魔法の設定をかえました。

2話　王様に会おう

三城　麻衣　視点

「お父様、勇者である。ミシロ　マイ　様とその兄であるミシロ
シュウタ　様を連れてまいりました」とレイが言う。

「うむ、ご苦労であった。ではレイ今日はもう下がってよいぞ」と
威厳のある声で言ってきた。

「わかりましたお父様、それでは失礼します」

「お初めに掛かります。私は三城　麻衣と申します。魔王を倒すた
めに呼ばれたと存じます」と丁寧に答えた。

「初めまして、麻衣の兄の秀太です。秀太でいいですよ」と無敵ス
マイルをかます。

すると、「まぁ、なんて可愛らしい子なんでしょうシュウタ君はい
くつなの？」と王様の隣にいた
美しい王妃様が、言ってくる。

「エ、エリーシャ、今はわた「あなたは黙っていて」はい」王様を
一喝して黙らせる美しい王妃様
―あぁ王様の威厳がなくなっている…

「僕は１７になります。王妃様」

「まぁ！１７歳！？もう成人しているのですか！シュウタ君なら私

と結婚しない？」とんでもない発言をしてきた
そうこの国では１６歳で成人なのだ。

「エ、エリーシャ！？私「離婚よ」はい…ってエッ！？」王様が慌てている。理不尽すぎると思う。
…もう王様がただあわてているオジサンにしか見えないよ。

「結婚はお断りします。王の仕事は忙しいと聞きますし…」と駄々をこねる攻撃をお兄ちゃんは繰り出した。

「心配しなくても大丈夫だわ、あなたは必要な時だけ座っていればいいのよ」と微笑むレイナール王妃様
…無理だと思うな～お兄ちゃんを落とすのは、と私は冷静にかんがえる。

「えっと…じゃあそれ以外は、何してもいいのですか！？」と目を輝かせながら言う。
…まさかの食いついた！？

「ええ！もちろん食事とかそういうものも心配しなくていいわ…それじゃあ、けっ「お待ちくださいお母様！！」チッ」王妃は舌打ち？をしながら声の主の方を見る。

「お母様、さすがにそれはいけません王妃様は相応の態度でしめさないとみんなが動揺してしまいます」と金髪で縦ロールの赤のドレスをきた美少女が言う。
…うんさっきから周りがざわついているもんね。とその意見に納得した。

「う…ゴホン…大変失礼いたしました。王、続けてください」どう

やら周りの雰囲気にきずいたらしい。

「あっ…ああ、えーと、私は、アレイス＝スフィードだ。よろしく頼む」一番最初と同じ態度で言ってきた。

…無理しなくていいよ王様

「私は王妃のエリーシャ＝スフィードですわ」と微笑みながら言う。…あれがなければな～っと勝手に思う。

「私は第二王女のファーム＝スフィードよ」と金髪縦ロールの子が言った。

…さっきはありがとう。でもお兄ちゃんの方を見て赤く顔を染めるのは気のせいかな？

「ほら、セリーヌあなたの番よ」とエリーシャさんに言われて後ろから顔を出す。…かわいい

「わ、わ、私はセ、セ、セリーヌ…5歳です」と小さく金髪で青い目の美幼女が答えた。

そしたら、お兄ちゃんが「セリーヌちゃんこっちにおいで飴あげるよ～」と笑顔でこたえて、片膝をつく

…ああ、お兄ちゃん子供を見るとすぐこれだから

「アメ？あめってな～に？」と首をかしげて答える。…ヤバイかわいい！欲しいかも

「あま～い食べ物だよ。甘いものは嫌い？」とこちらも首をかしげて答える…いい勝負だ

「甘いものしゅき〜〜！！」と言いながら階段を急いで降りようとする…危ない！！

「セ、セリーヌ！！」驚愕の顔でエリーシャさんが叫ぶ。

・・・・・

１０段位の階段を顔から落ちようとした瞬間お兄ちゃんが動いた。

…いや動いていた

「「「えっ！？」」」

あまりにも速すぎる行動に誰も何が起こっているか分かっていない状態だ。

セリーヌちゃんまでの距離は約１５メートルだった。

ざわざわとざわめく会場…しかしお兄ちゃんは気にすることなく

「こらこら〜だめだよ〜階段を急いで降りようとしたら〜」と優しく微笑む。

「ごめんなしゃい、…お兄ちゃん」と泣きそうな顔でそう言った。

「うん、いいよ、いいよ、それじゃあ、はいこれ」そう言ってお兄ちゃんは飴をわたす。

「おいし〜〜い！！ありがとうお兄ちゃん」そういってお兄ちゃんに抱きつく

…ムッ、いかんなそれは…ちょっと嫉妬した。

「は〜いどういたしまして、セリーヌちゃん偉いね〜」そういって頭を撫でていた。とても嬉しそうだ

…いいな～そのポジション変わって～

なぜだろう…女性の人たちが嫉妬と羨望の眼差しをセリーヌちゃんに送っているのは…気のせいだと願う。

三城　秀太　視点

騒動も一段落(ひとだんらく)ついて、僕たちは、世界の情勢について聞いた。

「今、世界では魔物が多くおる」と王様は睨みながら言う。

どうやら、大変なことになっているな～僕は思う。

「…お兄ちゃんそろそろおろしたら？」と麻衣が心配そうに僕をみてくる。

「セリーヌ、こちらに来なさい。私が抱っこしてあげるから」と王様は言う

「イヤだ、ここがいい。とーさまのところはイヤ」とセリーヌちゃんは王様から顔をそむけながら言う。

「ぬ、ぬうっ！？そ、そうか…」と僕の方を見ながら王様は言う。

「まぁ、僕は別に気にしてないし、それにセリーヌちゃん軽いから」と麻衣から習った。体重軽いよアピールを使う。＜プロローグ参照＞

「えっ！？今それここで使う！？」とかなり驚かれた。
「えっ？…褒めるんじゃないの？」と不満をぶつける
「いやいや、気づいてよ。てか何で気づかないの？」と意味のわからないことを言ってくる。
麻衣がそう言ってようやく気がついた。兵士やお偉いさん達が麻衣をぼーっとしながら見つめていたのだ。…けしからん
なるほど、これは後で一言いわないとな。と思った。
「心配するな、麻衣。僕がなんとかするさ」と自信満々に言った。
「いや無理でしょ！？…ああ、お兄ちゃん勘違いしてるでしょ？」と呆れ顔で言ってくる。
「何で僕がしょうがない子だなみたいな顔をされなきゃいけないの？」
「ゴホンッ！お主たちそろそろいいかね」と王様は何故か僕を睨みながら言う。…なんで～？
とりあえず僕たちは謝り質問をする。
「この国の他に勇者はいないのですか？」僕が言った。
「いや、勇者はこの国だけのものだ。ほかの国にはない」
「魔王は勇者以外には倒せるのですか？」麻衣が言った。
「それが…恥ずかしいことに私は魔王の前までたどり着けないのだ」

と申し訳なさそうに言ってきた。

「そうなんですか…」と麻衣は落ち込んで言った。

「あ、そういえば勇者を召喚したのは何回目なんですか」場の雰囲気を変えるため僕は言った。

「あ、ああ、今回で三回目だ」と王様は言った。

「ふ～ん、ということは魔王も今回で三回目ということか～」と僕は言った。

「お兄ちゃん、何当たり前のことを言ってるの？」

「んっ？お主たち何をいっとる、魔王はまだ死んでおらんぞ？レイから聞いておらんのか？」と眉を潜めて王様が言った。

「…へ～」

「えええーーーーーーーー！！！」と麻衣が叫んだ。

「う～ん、お姉ちゃん、うるさい～」セリーヌちゃんが不満顔で言ってきた。

「あっごめんねセリーヌちゃん」麻衣はセリーヌちゃんに頭を下げる。

「ごめんよ～セリーヌちゃん」そういいながら、僕は頭をなでる。…嬉しそうだ。

何かみんなに睨まれてるような～…

「…それで勇者はどうなったんです？」と麻衣が聞いた。

「うむ…そのな…死んでしまった」と言いにくそうに王様は言った。

「なっ！？そんな…魔王に殺されたのですか？」と僕は言った

「いや、このあいだ魔物に殺された…」と王様は言った。

「えっと…なんですか？最近殺されましたよみたいな感じなのは…」僕は言った。

「うむ、一回目の勇者は一ヶ月前、二回目は五日前だ」きっぱり、はっきり言った。

「……あの洞窟にある魔法陣は最近出来たのですか？」麻衣が言った。

「いや、あれは最近になって、起動しだしてそれを使ったのだ。勇者が来るのをレイだけが感じれてな、あそこの洞窟は、レイ意外のものを入れないように結界が張ってある」と王様は言った。

「でも、心配しなくて大丈夫よ。マイちゃんから感じる【魔力】は前の二人と比べ物にならないとレイが言っていたわ」と王妃様が微笑みながら言ってくる。

「うむ、そうだ。お主はただならぬ感じがするからな」と王様は言った。

「はぁ～…そうですか」麻衣は納得のいかない様子で言っていた。

3話　模擬戦をやろう

三城　麻衣　視点

王様の謁見が終わった。正直ものすごく疲れた。王妃様はご乱心になるわ、王の間にいた。女の人達を虜にするわ、王女様達の心を鷲掴みするわ、など、とんでもないことをお兄ちゃんはやらかし続けた。

このあとは宝物庫で武器を選べるというので、私たちは、宝物庫に案内された。

「ここの中から好きなものを選んでくださいますようお願い申し上げます」とメイドさんが丁寧に答えた。

「おお～すっごーーい！」お兄ちゃんはワクワクしながら言っていた。

…あ～あ～メイドさんが愛おしそうに見てますよ～気づいて～お兄ちゃ～ん。

まぁ、気づくはずもなくお兄ちゃんはサクサク奥に進んでいく。

「あっ、待ってよ～お兄ちゃ～ん！」私はそう言いながら後に続く。

「う～ん、ないな～」

「何を探しているの？」

「えっとね、刀だよ」

「この国にあるのかな？聞いてみれば？」と私は言った。

「うん、そうだね。んじゃ、さっそく！」と言ってピューっと入口まで走って行った。

「相変わらずだな～お兄ちゃん…」私はそう言いながら苦笑いをする。

そう言って私は考え事をする。

私は恐いのだ。魔物というのが…勇者を殺したという魔物が…正直に言って逃げ出したい。元の世界に帰りたい。でもそんな我侭は言えない。…私があの時、外にでなければこんなことにはならなかった。…今更ながら後悔する。

お兄ちゃんは、怒ってないのかな？恨んでないのかな？どうなんだろう…

「お～い麻衣なんかね。ないらし…麻衣？」なんかお兄ちゃんが真剣な顔で私を見てくる。

「なんで泣いているんだ？…何かされたのか？」お兄ちゃんが周りを警戒しながら言う。

「えっ？泣いてるの？私？」泣いてることに私は今、気がついた。

「いやいや、何でもないよ！心配してくれてありがとねお兄ちゃん」私は笑顔でごまかした。

「…そうか、わかった。でも何かあったらすぐに僕に言ってね」笑顔でお兄ちゃんが言ってきた。

「うん！」私はそう言ってもらうのが嬉しくて元気よく頷いた。
話が戻りどうやら刀はないらしい。…仕方ないよ元気出してお兄ちゃん。
「う～ん、そしたらあとはナイフみたいな…あっ！！」お兄ちゃんは突然さけんだ。
「ど、どうしたの」
「そういえばね、僕、ナイフ持ってきてたんだ。」と嬉しそうにお兄ちゃんは言った。
「えっ？…なんで持ってきてるの？」驚いて私は聞く。
「いつも、護身用のために持ってるよ？」当然だよって感じで言ってきた。
「そ、そうなんだ…それで今どこにあるの？」
「部屋の中だよ～それじゃ早速」「あっ…お兄ちゃんそれならあと…行っちゃった」私は苦笑いでそう言った。
「う～んどれにしようかな～」私は迷った。
「やっぱり、持ちやすい片手剣かな」そう言って一つの片手剣を手に取る。
全体が白で統一されたものでよくわからないが剣の刃の部分だけ黒

色だった。

「なんか、色に惹かれたしこれでいいか」適当に決めた。…適当一番　ｂｙお兄ちゃん

「おっ、麻衣それにしたのかい？」とお兄ちゃんが言ってくる。

「あっ、お兄ちゃんナイフあったの？」

「うん、ここに来るときに着ていた服の裏ポケットに」そういいながらナイフをみせてくる

全体が黒色のサバイバルナイフだった。

「それで本当にいいの？」私は眉をひそめて言う。

「うん、これ愛着あるしね」そう言ってお兄ちゃんはナイフを見る。

「ああ、そういえば、シャルが模擬戦を中庭でやろうって言ってたよ～」とかる～く、ゆる～く言ってきた。

「えっ！？模擬戦！？いきなり！？」私は突然のことでびっくりする。

「まぁ、とにかく中庭にいってみようよ」お兄ちゃんは私の手を引いて連れ出した。

中庭にメイドさんに案内してもらうと、…なんかたくさん人がいた。

「おお、勇者様のおでましだ。」

「綺麗～！かわいい～！」
「俺と結婚してくれ～～～！！」
「前の勇者様よりぜんぜんいいわ～」などと、あちらこちら声があがる。…やめてほしい
「麻衣、まっていました！」とレイが声をかけてくる。
「いったいこれはどういうこと？」わたしは慌てて声をかける。
「何って模擬戦の会場作りですけど…」
「いや、これはいくらなんでも人がおおすぎ…」と私は呆れながら言う。
「きたか、では麻衣、早速はじめるぞ」とシャルが言ってくる。
「えっ！？あっ…ぅん」さすがに断れなかった。
シャルは、私から３ｍくらい離れたところに立った。
「レイ…そういえばシャルはどのくらい強いの？」立ち去ろうとするレイに声をかける。
「えっと…一般の兵士を１０人くらい一気に相手できるくらいですけど」と普通に答える。
「…強すぎじゃん」シャルはとんでもない人だった。
「あ！そうそう麻衣ちょっと耳かして～」とお兄ちゃんが言ってくる。

「何？お兄ちゃん」

「うん、あのねいきなり本気で戦わないほうがいいよ」

「えっ！？何で？」

「セリーヌちゃんを助けたとき、明らかに身体能力が上がっていたんだ。だから、体が慣れてから本気をだしたほうがいいよ」と言ってくる。

「へぇ～、そうだったんだ～」と納得する。…もっと早くそんなことは言ってよ。とは言わなかった。お兄ちゃんだから許す。

「なんだ、作戦会議はもういいのか？」シャルがにやっと笑って言ってくる。

「うん、もういいよ」

「では、ルール説明を致します。相手に直接剣を当ててはいけません。それと剣を落とした時点で負けとします。降参はありです」と審判をする人が言った。

「はじめ！！」審判の掛け声と共に二つの剣がぶつかりあった

4話　模擬戦をやろう2

三城　麻衣　視点

キンッ！――ガギィン！キィーン！剣の打ち合う音が中庭に響き合う。

「やぁ！！」私は突きを繰り出したが、寸前で剣で止められる。「フッ！！」シャルが少しできたスキを狙って私の脇に当てようとしてきた。しかし、わたしはバックステップで後方に下がって、すぐに間合いを詰める。

「くっ！！」シャルが辛そうな声をあげた。…正直言って、シャルは驚くほど強い。いつもの私ならすぐに負けていただろう。しかし、今の私はシャルと五角にやりあえている。しかし身体能力の差をシャルは剣の技量でカバーしている。…さすがだ。

「はぁ～！！」シャルは突きをしてきた――今だ！私は、体をひねって最小限でよけ、そして首を狙って剣を振る。

「かかったな」シャルはそう言って、体を縮めた。「なっ！！」私の剣はそのまま空を切り、私の首筋にシャルは剣をつけた。

「勝負ありだな」

「…参りました」

「「「オォォォ～～～～～～～～！！！」」」

と大歓声があがった。

「負けた原因は経験の差だろうな、あそこで本気できたとおもったのだろう？」とシャルは聞いてくる。

「うん、本気で来たと思ったから…」と落ち込みながら言う。

「まぁ、そんなに落ち込むな。剣の技量が私より上だったら確実に麻衣が勝っていたぞ？」と言ってくれた。

「ありがとうございました。今度よかったら剣を教えてね？」と私は手を差し出す。

「ああ、もちろんだ」シャルも手を出して握手をした。

「…さてと、次はシュウタお前だな」シャルはそう言って真っ直ぐお兄ちゃんを見る。

「えっ？…ぼくもやるの？」めちゃくちゃ嫌そうだ。

「当たり前だ。お前の実力も知っておきたいしな」

「いや、でも…僕はシャルより強いよ～」とゆる～く言ってきた。

「何？それは本気で言っているのか？」と少し怒った感じだ。…どうしよう

「シュウタ…無理です。シャルにはかてませんよ？」とレイが心配そうに見つめる。

「お兄ちゃん…さすがに謝ったほうが…」

「えっ？でも…事実だし…」

「そうか…なら本気の殺りあいをしよう」シャルが我慢の限界と言う感じだった。

「シャル！？あなたは自分が何を言っているのか分かっているのですか！？」レイが驚愕を露にしながら言った。

「ええ無論分かっております。大丈夫です。私は負けません」そうシャルは言い放った。

「…僕またやらかした？」お兄ちゃんが私に聞いてくる。…うん、もう今回ばかりはもう知らない。

「はぁ～もう本気でやっちゃえば？」

「…わかった」お兄ちゃんが、いつもと違う雰囲気で言ってくる。

私はその瞬間、しまったと思った。

「おにいちゃ「おい、シャル…本気でやってやるよ」ッ！」…もう遅かった。

「シュウタ？お前どうしたんだ？」シャルが眉をひそめて言ってくる。

お兄ちゃんはそれを無視して、「おい、審判さっさと始めろ」と冷たく言う。

「し、しかし、…殺しとなると」オロオロしながら言った。

「聞こえなかったのか？さっさと始めろ…二度目はねぇぞ」冷たく静かに審判を睨む。

「ヒッ！ヒィィィィィーーーー！！」そう言いながら審判は逃げ出す。

「ちっ、腰抜けが…まぁいい。…いつでもいいぜシャル」

「ほう…それがお前の本性か、だが…武器も何も持たずに本気とは笑わしてくれる！！」そう言って一気にお兄ちゃんに詰め寄る。

しかし、お兄ちゃんは居なかった…いつの間にかシャルを通り過ぎていた。

バタッっと倒れる音がする。…シャルがうつ伏せで倒れていた。

シーンっと中庭が静まり返る。少しして「なんだ？…何が起こった」「どういうこと？」「何をした？」っとざわざわとする。

「あ…あれが、…シュウタの本気なのですか？」とレイが呆然としていた。

「えっと…うんそうだよ」

「そ、そうなのですか…しかし恐ろしいですね。シュウタ…」

「嫌いになった？」

「いえ、そんなことはありませんむしろ好きになりました」と私にカミングアウト…モテる男はつらいね～

「ふ～ん、お兄ちゃんのことが好きなんだ～？」とレイをからかう
「ッッ！！い、今の、なしです！な～し～！！」と顔を真っ赤にしながら言ってくる。
「お兄ちゃ～んレイがね～、おにいちゃ「何でもありませんよ～！！シュウタ～！！」ムッ！」
お兄ちゃんはシャルのケガの具合を見ていたみたいで顔をこちらに向け「何？」といつもの調子で首をかしげていた。

――――――――――――

中庭の騒ぎから、数時間たち今は夜…壮絶な一日だったと我ながら思う。これが毎日続くとなると…死んじゃうよ～
今は、部屋で就寝だけど眠れない…
う～んどうしよう…あっ！そうだお兄ちゃんと寝よう。私はそう思って自分の部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れた。
ノックをしようとしたら部屋の中から声が聞こえてきた。
「シュウタわたしのほうが・・・・・いいですよ」
「私の方がいいもん」
「いや～そんなとこ・・・・・ダメです！」

「あっ！？そこもダメ！！」
「別に・・・いいじゃん・・・・」
「「「あ～～！！ダメ～～～！」」」
バンッ！！「お、お兄ちゃん！？」素っ頓狂な声をあげて私は扉を開ける。
…そこには三人のネグリジェ姿をした皇女たちがベットの上にいた。
「…いったいそこで何をしてたの？」と少し怖い口調で言った。
「いや、これはその…って麻衣も何しに来たんですか？」と慌てながらレイが言ってきた。
「私はお兄ちゃんと一緒に寝ようと思って」
「えっ！？シュウタと…い、一緒に寝るんですか…」と恨めしそうにレイが見てくる。
「なんだい？眠れないのかい？」とソファでくつろいでいるお兄ちゃんが言ってくる。
「うん、それにお兄ちゃんに話したいこともあるし…」そう言って俯く。
それを察したのかお兄ちゃんは「ごめんね、大事な話があるから今日は帰ってくれるかい？」と三人の皇女達に言った。
レイもそれが分かったらしく駄々をこねている妹達を言い聞かせて「それでは、おやすみなさい」と言って出ていった。
「…ねぇお兄ちゃん何でレイ達がいたの？」

「んっ？ああ、セリーヌちゃんがここに来たかったらしくてねそれで付き添いでついて来たらしいよ」

「そう…でも何でベットの上で？」

「なんかここで寝るってセリーヌちゃんが言い出してね。それなら自分たちもここで寝るって言ってね。僕をどこの位置にするかレイ達が揉めていたのさ、僕は別にソファでいいって言ったけど、それも却下されてね～」と微笑みながら言ってきた。

私はふーっと息を吐いて

「…お兄ちゃん、私を恨んでない？」勇気を出して聞いてみた。

「いきなりどうしたんだい？…恨む？何をさ？」

「私がお兄ちゃん外に連れ出したせいで、ここに来んだよ！？」私は強く言った。

「そんなわけないよ」とソファから立ち上がる。

「でも…でも…！！」

お兄ちゃんはそっと私を抱きしめて、「なんだい？そんなことを気にしていたのかい？優しいね～麻衣は」

私はそこで泣いた。声を出さずに静かに

「いいよ、いっぱい泣きなさい。僕がいつでも麻衣を守るからね」

「おウチ…かえ…りた…いよ」

「大丈夫、僕が絶対になんとかするから、…絶対に」お兄ちゃんはそう言って、私をベットまで運んで

「おやすみなさい麻衣、今日はいい夢が見れるよ」そう言って微笑んだ顔を見ながら私は眠りについた。

5話　覚醒

三城　秀太　視点

ここはどこだろう…僕はそう思いながら、なにもない世界にたたずんでいた。

『あなたを待っていましたよ秀太』

そんな声がきこえてきた。

―あなたは誰？

『わたし？わたしは――――――よ』っと黒髪黒目の妖艶な女の人がこたえる。

―ごめん名前が聞き取れなかった。もう一回言ってくれる？

『――――――よ…その様子じゃまだ聞き取れないみたいね』すこし悲しそうに言ってきた。

―えっと、ごめん？

『いいえ、あなたが気にすることではないわ』

―ここはどこなの？

『ここは、そうね…【狭間】とでもこたえておくわ』

―【狭間】？そこに何で僕がいるの？

『それはね、わたしがここに呼んだから』悲しそうに言ってくる。

―どうしてそんなに悲しそうなの？

『…ここからでられないからよ、そしてあなたに力を与えるために呼んだの』

―力？

『そう、あの【七柱神（セブンスゴット）】を倒すための力よ？さっそく与えるわ』

―【七柱神（セブンスゴット）】？何それってうわっ！！

僕の中黒い光が入ってくる。そして…

『使い方は分かったはずだわ、もう時間がないの。ごめんなさい。』

彼女は悲しそうに微笑みながら言った。

―待ってまだ話したいことが！

『また、会えるわ心配しないで』

そうして、俺は意識をなくす。

―――――――――

「おに…ちゃん、お兄ちゃん」

誰だ？

「お兄ちゃん！お兄ちゃん朝だよ起きてよ～！」

「ん…朝か…おはよう麻衣」

「うん、おはよう…お兄ちゃん大丈夫？ずいぶんうなされていたけど…」

「えっ？うなされていた？…そうか、心配してくれてありがとね」

僕はそう言って、麻衣の頭を撫でた。

「えっ…うん、どういたしまして」そう言って、目を細めながら喜んでいた。

「さてと、今日はなにするんだっけ？」

「もう忘れたの？今日は常識のお勉強と魔法の訓練って昨日言われたでしょ…」

「ああ、そうだったね、とりあえず、準備しますか。」

コンコン、「失礼します。朝食の準備ができましたので…」メディアが入ってきた。

「し、し、失礼しました！！」バタンッ！！とドアを勢いよく閉めて、メディアは出て行った。

「あ～！！ちょっと待って色々と間違っているからメディアさ～ん！！」麻衣はなぜかそう叫びながら出て行った。

「いったい、なんなんだ？」理解不能であった。

とりあえず、朝食をすませて、王城の図書室に向かう。…お勉強だ。図書館に着くとメディアとメディアのそっくりさんがいた。

「はじめまして、シュウタ様。わたしは、メディアの姉でマイ様の専属メイドのメープル＝クレイアです」ニコニコでふわふわしている感じの人

だ。

「あ、どうも三城　秀太です。秀太でいいですよあと敬語はなしでもいいですよ」

「…ええ、しかし敬語は自然口調なのでお気になさらないでください。よろしくお願いします…シュウタ」

「こちらこそ、よろしく」僕はそう言った。

（どういうことですのメディア？握手してくれないのですが…）

（そんなはずは…もしかしたらわたしだけ特別かも…）

（それはいけませんね、抜け駆けは許しませんよメディア）

（お姉さま、あきらめてください）

「二人とも！そこまでだよ！」麻衣が怒りながら言う。

「「申し訳ございません」」二人は麻衣に頭を下げる。

二人はなにかこそこそ言っていたが…僕は何か間違えたのだろうか。

「二人ともすまない、気を悪くしてしまって…」

「「いや！！ち、違うよ（ます）！！そんな顔しないで（ください）」」ほとんど揃って言われた。

「そうか…気を使って「お兄ちゃんは黙ってて！！」ッ！」…なぜか麻衣に怒られた。

「とりあえず、はやく常識について教えてもらおうね」麻衣は笑顔でいったが…目が笑ってない。

「わかりました、まずは世界の国ついて教えます」メープルさんはそう言って説明をはじめる。

…うん、なるほどねこの世界は5つの国があるわけで獣人の国、リムール王国、エルフの国、ユイシャール神国、竜人の国、シュバーツ帝国、魔人の国、テリュート魔国

今回戦争の原因になったこのテリュート魔国の魔王を倒せと

…あれ僕が想像していたものと違うようなまぁいいか。

「えっと、次は通貨について、はなすね」メディアがそう言って説明をはじめる。

…お～け～理解した。要するに、銅貨１００枚で銀貨１枚、銀貨１０枚で金貨１枚、金貨１０枚で白金貨１枚となり、そして、平民の一ヶ月の収入が１金貨か…うん、分かった。

「まぁこのくらいですかね～後は魔法についてですけど…」ドンッ！と本の山を置く。

「まずは、これをよんでください」メープルが言った。

「や～、よかったな麻衣まぁ頑張れよ」

「え…お兄ちゃん読まないの！？」悲痛な顔で言ってくる。

・・・

「今回ばかりは無理でしょ僕これは扱えないし…」

「ううっ…今日中に終わるかな」めっちゃ泣きそうだった。

「とりあえず俺は部屋にもどるよ…頑張ってね」

「あっ！待って～シュウタ～！」

僕とメディアは図書室をでた…さぁて、もらった力でも試しますかね～

部屋に着いて、僕はもらった力について考える。

あの黒い光が体に入ってきて、力の使い方や、能力についての知識が頭に流れ込んできた。あの人がくれた力の名前は【終始魔法（エンディレス）】と言う。

この魔法は対象をなかったことにすることができる。つまり、この場から移動させたり、跡形もなく消しさることができる。他にはケガをなかったことにするなど応用も利く。

…そして、もうひとつが対象をあったことにするだ。

これは対象が死んでいたり、この場にいなかったりしても、生き返らせたり、近くに呼び寄せたりする。これも、ケガがあったことにするなど、こちらも応用も利く。

さらに制限がない…どこでもできるのだ。

この魔法を使えば、瞬間移動ができる。…便利だね～

この魔法を使えばあらゆる場所が把握できるのでいけないところがない。しかし、問題が一つ…この異世界から移動できない。何でだろう？

宇宙は行けるみたいだけど…絶対に酸素ないよね～

というわけで、魔王をなかったことにしようかな～（にやにや）…

いかんいかん思わず顔が

まぁ～魔王の顔くらい見てあげようかな～。

「メディア～」

「はい、何？シュウタ？」どうやら、部屋の掃除をしていたらしい

「ちょっと、散歩してくるね～」

「私もついていっていいですか」メディアは上目遣いで聞いてきた。

「ごめんね～散歩っていっても用事なんだ～2時間くらいしたらもどるよ」とかる～く嘘をつく

「そうなんですか…」少し俯いて言ってきた。

「ごめんね～じゃあさ、今度一緒にどっかに買い物に行く？」

「ほ、ホントですか！！無論、雨が降ろうと、嵐が来ようとも絶対いきますよ！！ヤッターー！！」なんかかなり喜ばれた。…なんか高いの買わ

されるのかな～。…ぶるぶる

そして、喜んでいるメディアから見えない位置で瞬間移動を使った。…さぁはじめようか魔王狩りを

三城　麻衣　視点

あ～、つかれるな～でも、色々と分かったことがある。

魔法は、【火】【水】【風】【雷】【光】【闇】で構成されている。これを操るには精霊と契約を交わすか、魔法を自分で作るしかない。

精霊で契約するには、自分の【魔力】を外に放出して、精霊にあたえる。気に入られたら、精霊が契約に応じてくれる。契約はどこでもできるら

しい。ちなみに、メープルは【火】と契約をしているらしい

…まだこの本半分しか読んでないけど分かった。

「実際にやってみていいかな？」私はメープルに聞いた。

「最初に精霊と契約をかわさないダメだと思いますけど…」

「精霊ってどこにもいるからここでもいいよね？」

「まぁ、そうですが…できるんですか？」怪訝な表情で聞いてくる。

「たぶん…え～と、不安だからやっぱり中庭に行こう」そう言って

中庭に移動をした。

「んじゃ、やってみますか」私はそう言って、【魔力】を放出するイメージを作る。

「す、すごいですわ…【魔力】が相当量でているのが肉眼でもわかります！！」メープルは興奮しながら言った。

精霊？が私の目ではっきりとみえた…【光】？かな

私は光っている物体をじ～っと見つめる。そしたら、急に私の中に入ってきた。

「わわ、は、入ってきたよ！！」私はかなり慌てた。

「えっ！？精霊が見えるんですか！私は見たことなんてありませんわ！」メープルは驚きながら言った。

「いや、なんか体の中に入っていった…」

「とりあえず魔法を使ってみたらどうですか？」メープルはそう言って木の方を指す。

「よし、いくよ！【火槍（ファイアランス）】」私が出した数本の火の槍は数本の木々に刺さった瞬間、一瞬にして炭化した。

「…短詠唱でしかも創造魔法に匹敵するほどの威力…規格外ですね麻衣…」驚きを通り越して呆れていた。

「いや～ちょっとやりすぎちゃったね～ごめんね」

「これは、育てがいがありますね～これからもがんばりましょ麻衣」メープルはそう言って私に言ったが…目が笑ってないのはなぜ？

この後、麻衣は宮廷魔法師に色々と聞かれ揉みくちゃにされた。なんで遠くから笑ってるの？助けてよメープル…

――――――――

やっと、宮廷魔法師に解放されたときは…もう夕方だった。…そんなに珍しいのかな

ここに来て二日目だな～っと部屋のベットの上でぼーっと思っていると

「麻衣！シュウタ知らない？」なんかメディアが慌てているようだった。

「メディア、ノックはきちんとしないといけないでしょ？」とメープルが注意をする。

「お説教は後で聞きます。お姉さま。それよりもシュウタが…！！」

「お兄ちゃんがどうかしたの～？」私は疲れている体を無理やり起こした。

「朝からずっと帰ってきてないの。2時間くらいで帰って来るって言ったのにまだ…！！」悲痛な顔で言ってきた。

「うそ！？…お兄ちゃん言ったことは大概守るのに…」

今は夕方だから…8時間くらい帰ってきてない…何か巻き込まれたのだろうか

「お兄ちゃんは他に何か言っていなかった？」

「分かりません…2時間でもどること意外は…」メディアはしゅんっとうなだれた。

「メディアこのことは、王様たちに報告しましょう！」メープルはそう言って落ち込むメディアを引っ張って颯爽と出て行った。

お兄ちゃん絶対に無事でいてね…もしもなんて絶対私は嫌だよ！！

私はそう思いながら、部屋を急いで出た。

5話　覚醒（後書き）

9／22　火の槍→火槍に変更しました

6話　魔王狩り（前書き）

お気に入りにしてくださった方、評価をしてくださった方
本当にありがとうございます。これを励みに頑張りたいと思います。

6話　魔王狩り

三城　秀太　視点

「よっと」
僕は魔王城の前に降り立った。なぜ魔王城の前だって？それはね、魔王城の構造が把握できなかったんだ～。
でも、今はそのことは正直どうでもいいです。なんか居るんだよね～。

「ガルァァァ！！」

犬？いや、これは狼だね。しかも真っ白なんだよ。…全長１００ｍくらいかな？

「ガルァァァ！！」あっ、突撃してきた。僕は横によける。狼が正面を向いたので、あれを使う。

――――キッ！！

…睨みつけました～

狼は急に止まり、僕の前でひれ伏す。…震えてるよ。

「大丈夫、君には何もしないよ…その首輪は拘束具みたいだから外

すね～」僕は優しく声をかけた。

【その首輪をなかったことにする】

狼の首輪が跡形もなく消え去った。

「さぁ、君は自由だ。どこでも好きなところへお行き」

「ガウッ」なぜか狼は僕の前から動かない…もしかして

「一緒に行きたいの？」

「ガウ」狼は首を縦に動かす。

「う～ん、別に僕は構わないけど、その大きさじゃ不便だな～」

「ガウガウ！」そう言って狼はみるみる小さくなって、５０ｃｍ位になった。

「おお！それなら、持ち運びができるよ。そうだ、ここにおいで」

僕はそう言って胸の中に入るように促す。

狼はトテトテ歩いてきて、僕の胸の中に入る。首だけをちょこんっと出しているのが可愛い。そして、毛がふわふわのもふもふだ。

最高すぎて眠く…いかんいかん、目的を果たさなきゃ。

さてと、…どうやら魔王城は結界が張られている感じだった。…だから構造把握できなかった訳ね。この魔法、意外に欠点あるんだな

～。

邪魔なんで消しますか。

【その結界をなかったことにする】

結界は壊れる音も立てず消え去った。

「さぁて、魔王狩りはじめますか～。」

「ガウガウ！」

そして僕は瞬間移動を使った。

「なにものだ、そこのアリよ」静かに響きわたる声が聞こえた。

僕は周りをゆっくり見渡す。正面に王座に座る魔王が居て両脇に…女の人を抱えている。うん、ハーレム

そして横には側近が居て、王座に続く道は、兵士がずらりと並んでいる。

「聞こえなかったのか、人間のアリよ。貴様はなにものだと聞いている」魔王が言ってきた。

「ああ、それ僕のこと？」

「貴様以外に誰がいると言うのだ？人間のアリよ」魔王は僕を見下してくる。…もう消そうかな～

「人間なのか、アリなのかはっきりしてほしいんだけど…」もう少し遊ぶことにした。

「ならば、アリよ貴様はどうやってここに来た？」

「えっ？僕がアリにみえるの？…医者を紹介しようか？」心配なので聞いてみる。

「…馬鹿にしてるのか貴様は！！」

「馬鹿にはしてないけど（嘘）」

「馬鹿にしてるではないか～！！こいつを殺せ！！」魔王が兵士たちに指示を出す。

【お前の存在をなかったことにする】

僕は兵士達が襲いかかる前に魔王を消した。…いや～あっけない。

「魔王様？」側近が訳がわからないという感じだった。

「あなたは一体何をしたんです？」…あれ落ち着いてる？

「いや、魔王をこの世から消しただけだけど…」

「「「ワァァァーーーー！！！！」」」

城中から大歓声があがる。…えっ？へっ…？

「あ、ありがとうございますあなたは私たちの救世主です！！」側近さんになんか感謝された。

「い、いや…よかったね～」…なんで？

「はい！これでこの国にも平和が訪れます。おい、お前たち宴の準備だ」

「「「はい！！」」」

「えっと、僕はこれで…」そう言って、城を出ようとするが…あれ？使えない？

…瞬間移動が使えなかった。どういうことだ？。…あれ、なんか暗く…

僕はそこから覚えていない。

――――ここはまたあそこ？

僕は周りを見渡す…いた。黒髪黒目の女の人

『お久しぶり、でいいのかしら？』女の人はくすくす笑いながら言ってくる。

――――いやそうでもないと思うけど…

『あらそう、あなたには言わなくてはいけませんね』唐突に言ってくる。

――――何をさ？

『あなたにあげた魔法はすごく魔力を消費するということよ』

――――今更ですか？遅いですよ～

『あら？怒らないの』女の人は不思議そうな顔で聞いてくる。

――――あの時は時間がなかったって言ってたし、この魔法を使い切れてない僕も悪いし…

『あなた優しいのね。ホントあなたでよかったわ』嬉しそうに言ってくる。

――――僕でよかった？どういうこと？

『それはまた今度ね』僕の頬に手で触れてくる…暖かい

『それじゃあ、またね。シュウタ』寂しそうにこちらを見ていた。

そこで僕は意識を失った。

目が覚めた。ここはどこだろう？

「あっ目が覚めましたか？」浅黒い肌の綺麗な顔立ちの少女がそこに居た。

「…あなたは誰？」

「申し遅れました。私はテリュート魔国王女、ナーレス＝テリュートと申します。英雄王」…はい？

「英雄王？僕が？」

「はい！そうですわ、あなたはこの国を救ってくれた英雄ですわ」嬉しそうに言ってくる。

話を聞いてみると、どうやらナーレスのお父さんを僕が倒した魔王が殺したらしい。そこで絶対的な力をもってこの国を支配していた

らしい。
魔王は戦争を起こしたり、国民に重い税金を課せたりなど、酷いことをやっていたらしい。…まったく～迷惑な野郎だ。

「そ、そうなんだ。あっ！僕の中にいた狼は？」

「はい、それならあそこに」彼女が指差す先にいた。…すやすや寝ていたよ。可愛いよ～

「あの子は、あなたの傍にずっといたんですよ？」

「ずっと？…そういえば僕が倒れてどのくらいたつの？」

「え～と二日ですね」

…やばいやばいやばい！！麻衣が皆が絶対に心配してる！

「えっと、一旦国に帰っていいかな？」

「えっ！？かえられるんですか？まだ何もお礼をしていませんのに…」寂しそうな表情で言ってくる。

「また来るからさ、待っていてよ。お礼はその時でもいいでしょ？」

「…わかりました。お急ぎのようですし…でも絶対にまた来てくださいよ」上目遣いで言ってくる。

「もちろんだよ。また来るね」

僕は寝ている狼…もうシロでいいや、シロを連れて魔王城を後にした。

自分の部屋に着いた。ああ～いいね～このベットも。僕はシロをおろして、ベットでまた寝ようと…

「お兄ちゃん？どこに行っていたの？」

そこには笑顔で立っている麻衣がいました。…目が笑ってないよ

「さ、散歩？かな」僕はおそるおそる言った。

「そうか～へぇ～二日間も散歩するんだ～そんな散歩があるんだ～知らなかったな～」ニコニコ

「い、いや～こんなに長くなるなんて思わなかったな～」

「お兄ちゃんのバカーーーーー！！！！！」麻衣はそう言って僕に殴りかかる。

「ぐほっ！！」素直に拳を受け取りました。…うん、ごめん悪かった。

「うぐ、ひぐっ！うううう～誘拐されたと思ってたよ～」麻衣はそう言って僕に抱きついた。

「ごめん、本当にごめんなさい、もうどこにもいかないよ。次からはちゃんと相談する」

僕はそう言って麻衣の頭を撫でてやる。

さぁて、終わったことだしそろそろ…

「シュウタどこに行くんです？」僕は窓から脱出しようとしたところを止められる。

おそるおそる振り返るとそこには、王女三人、メディア、メープル、シャルがいた。

「「「「「「「シュウターーーーー！！！！！！！」」」」」」」みんなして、そう叫ぶといっせいに襲いかかってきた。

ボコボコに殴る、蹴るの暴行を繰り返し、最後に僕が見たのはベットの下でぷるぷる震えているシロの姿だった。

…帰ってきてよかったのかな

そう思いながら意識を失った。

7話　騒がしい日常

三城　秀太　視点

魔王倒して、あれから五日がたった。その間僕は、例のボコボコ事件により寝込んでいました。

…二日間、目を覚ましませんでした。

腫れは、宮廷魔法師による治療で治ったらしいけど…今、僕は監禁生活を送っている。…なんで～？

正直かなり暇です。抜け出したいけど…無理だよ。常時監視がついてまわる。…さすがに部屋の中まではついてこないけど

なので、自分が使っている。【終始魔法（エンディレス）】について考えたいと思う。

この間、魔王の城の位置を把握するときは、城の位置だけ把握しようとした。要するに他の情報は入ってこなかった。

全体を把握できると言ったが、実際どこまで正確に把握できるか分からない。

なので、今から試してみたいと思いま～す。

「よっ」スーっと頭の中に情報が入ってくる。部屋の外にいる見張りの兵士、メイドさんの数、城の構造、城の外の様子、城下町の様…

「ぐぁ！！」僕はあまりの頭の痛さに声を出した。

バンッ！！「どうかなさいましたか！？」兵士たちが慌てて部屋に入ってくる。

「いや、大丈夫だよ何でもないよ～」

「そ、そうですか、顔色が悪いですが…本当に…」

「いや、大丈夫だよ。心配してくれてありがとね～」

「ハッ！それでは、失礼いたします」

兵士たちが出て行った後、シロが飛び出してきて僕を心配そうに見つめてきた。

「ありがとねシロ」僕はそう言ってシロの頭を撫でてあげる。

シロは「きゅ～ん」と言いながら、喜んでいた。

…魔法を使った結果だけど、城下町に入った辺りから頭が痛くなった。ここからの距離は３００ｍだ。

たぶん予想だけど、人間の脳の許容量を超えかけたから、拒絶反応を示したんだと思う。

「なるほどね～」僕はそう言いながらベットに倒れこむ。…便利な魔法はリスクも高いね。

僕には【魔力】がないと言われていたが、あの女の人はある？みたいな口調で話していた。

何が正しくて、何が間違っているのか…分からない、判断材料が足りなさすぎる。

…当面の目標はもう決まっている。元の世界に帰ること、そのためにもまずは情報収集かな～…今は無理か

そう言ってまた眠りにつく。

――――――

三城　麻衣　視点

お兄ちゃんが帰ってきて、五日がたったけど、お兄ちゃんが気絶した後が大変だった。

お兄ちゃんがボコボコにされて、倒れたあとペットのしたから白色の小さな狼がでてきた。

狼が出てきた後、みんなの顔が引き攣った。

「こ、これは、【白銀狼(シルバーウルフ)】ではありませんか！！」レイが驚いて言ってきた。

「【白銀狼】？何それ？」

「こ、この狼は魔獣の中でもトップクラスに入る魔獣なんですよ！！全長は１００ｍにもなるんですよ！！」

「でも、なんでお兄ちゃんに懐いているんだろう？」私はかわいい威嚇を続けている。【白銀狼】に触ろうとする。

「い、いけませんマイ！！この子がいつ大きくなるかわからないんですよ！？」メープルがとめようと私の前に割り込む。

「えっ？かわいいからいいでしょ～別に」私はそれでも触ろうとするが、やはりとめられる。

「とりあえず、シュウタが起きなければ、ことが進みませんね」シャルがそう言って、宮廷魔法師を呼びに部屋を出て行った。

宮廷魔法師が来たが…【白銀狼】がお兄ちゃんから退こうとしなかったため、治療が行えずにいた。

私は痺れを切らして、【白銀狼】に近づいて

「あなたは、お兄ちゃんのお友達？」私は尋ねた。

『この人は私の恩人だよ』

そんな声が私の頭の中に響いた。

「えっ！？しゃべれるのシロちゃん！？」私は体の特徴から思わず言ってしまった。

『えっ？なんで私の名前を知ってるの？』

「えっ？もしかしてシロが名前なの？」

『うん、この人が名前をつけてくれたの！』シロは尻尾をパタパタさせながら喜んでいた。

「へぇ～お兄ちゃんが名づけたんだ～」私は感心して頷いていると、

「マイお前は誰に話しているんだ？」シャルが怪訝な表情で聞いてくる。

「えっと…この子と話しているだけだけど…」

『他の人達にはきこえないよ』

「えっ？何で？」

『あなたは【魔力】が私の声が聞こえるレベルまで達しているけど、他の人達はダメみたいね～』

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私は三城　麻衣、麻衣でいいよ」

『よろしくねマイ』シロはそう言って、私に抱きついた。…ふわふわのもふもふだった。

みんなはその様子を見てびっくりしていたけど、宮廷魔法師の人はホッとした様子で、お兄ちゃんの治療を始めた。

傷は癒えたけど、意識はまだ回復していなかった。…疲労が溜まっていたのだろうとのこと。

みんなはやりすぎたかもしれないと、反省していた。

そんなこんなでお兄ちゃんが目が覚めて、事情を聞いたが、怪我をしていたので手当てをしてあげただけっと言った。

みんなはそれを疑わなかったけど、私にはお兄ちゃんが嘘をついているしか思えなかった。…妹何年やってると思ってんの？

こんな感じで大変だったけど、お兄ちゃんは何を隠しているんだろう？直接聞いてもダメだろうし、どうしようっと考えていてここ数日悩んでいる。…はやく強くなって魔王を倒さなきゃ。

だが、状況は一変する。

お兄ちゃんが帰ってきて六日の朝、城中なんだか慌ただしかった。何かあったの？っとメープルに聞いてみる。

「あ、それがですね。テリュート魔国を名乗る使いが国にきたんですよ」

「えっ！？魔王がいる人の国がどうして？」

「…どうやら、魔王が何者かに殺されたらしんです。詳しい話は私には分かりませんが…」

「…うそ、じゃあ何のために私達はここによばれたのよ…」

「…申し訳ございませんマイ」悲しそうにメープルが言ってきた

「いや、ごめんね。魔王が倒されたのは嬉しいよね」

「それと、王様が王の間に来てほしいとのことなんですが…」

「なんで？」

「マイとシュウタに聞きたいことがあるとか」

私はなんだろう？と思いながら、王の間に足を運んだ。

――――――

三城　秀太　視点

「おお、きたか二人とも」王様はそう言ってきた。

「何か用ですか？」

「うむ、この者が黒髪黒目の人はいないかと聞いてきたからの」

よ～く見てみたらいつぞやの側近さんだった。

「あ、あなたは英雄様ではありませんか？」…爆弾が投下されました。

「「「はっ？」」」みんなが声をあげる。

僕はすぐさま、側近さんの近くに行き、耳うちをする。

（僕が倒したことは黙っていてくれないかな～）

（どうしてです？）

（僕の能力はみんなには内緒なんだよ）

（わかりました。それでは、魔王を倒した記念の招待状なんですが）

（わかった、必ず行くからこの場をなんとか誤魔化してほしい）

（お安い御用です）そう言って側近さんは立ち上がる。

「申し訳ございません。どうやらこの人ではありませんでした」
「うむ、そうであったか。ご苦労であった」
「ハッ！それでは、記念式典の件どうぞよろしくお願いいたします」
そう言って側近さんは出て行った。
「ねぇ、お兄ちゃん一体あの人と何を話していたの？」麻衣が疑いの視線を向けてきた。
「いや、ただね誤解を解いただけだよ」
「誤解？」
「うん、なんか僕が魔王を倒したんじゃないかって」
「えっ！？お兄ちゃん魔王をたおしたの！？」麻衣が大声で言ったため、大勢の視線が刺さる。
「あはは、違うよ麻衣、いいかい、ここから魔王の城までいったい何日かかると思うんだい？」
「え～と急いで行って六日、普通に言って八日くらいだよね？」
「僕が居なかったのはたったの二日、物理的に考えて無理でしょ？」
「う～ん確かにそうだね～」…なんとか納得してくれたようだ。
「だから、僕は違いますよ～って言ってあげたんだよ」

「そうだったんだ～」

どうやら、今の説明でみんなも納得してくれたらしい。…良かった～

こうして、なんとか誤魔化すことができた。そして次からは変装してから行動しようと心に誓った。

7話　騒がしい日常（後書き）

今回は日常を描いただけです。退屈だったでしょうか？

8話　契約と能力

三城　秀太　視点

王の間での騒動が終わり、僕は今、中庭にいる。なぜかって？それはシロと契約するからです。

唐突すぎるのも困ると思うので説明すると、契約をしないと本来の力の半分も出せないらしい。

魔獣たちのほとんどは、契約をして主人と力を共有し合うとのこと。なので、力を取り戻して、恩返しをしたいとシロは言っていたらしい。あっ、ついでに麻衣に通訳してわかったことだよ。

契約すると言葉が通じ合うことだから、【魔力】なくてもいいらしい。

「じゃぁ、契約を始めようか」僕はそう言って、指を軽く切って血をシロに飲ませる。

ピカァーっとシロの体が光ってすぐにおさまった。…どうやら契約完了のようだった。

『私の声わかる？』シロが言ってきた。

「ああ、分かるよシロていうかメスだったんだね」

『レディに対してそれは失礼なんじゃない？』

「ごめんよ」僕はそう言ってシロを撫でてやった。

『くすぐったいよ～』そう言いながらも身を寄せてくる。

「どうやら、終わったみたいですね。シロが…とても羨ましいです」レイがそう言ってきた。

「やっぱり、かわいいよなシロは」

『ご主人、定位置に入りたいんだが』シロがそう言ってきたので胸の中に入れる。

するとレイが「な、なんてうらやま…じゃなくて、なんでそこに入れているんですか！！」

「だって、ここがシロの定位置だし…」

『ご主人、なぜ気づかない？』シロがおかしなことを言ってくる。

「うん？何に気づくかはいまいち分からないが、とりあえず部屋に戻ろうか」

『やれやれ、今度のご主人は大変だな』

シロはそんなことを言っていたが僕は気にせず部屋に戻った。

監視何時になったらはずれるのかな～
部屋に着いて、どうやって抜け出そうか考えていたが…すぐに思いついた。
「魔法を使って、変装すればいいか」そう言って早速取り掛かる。
【僕に金髪碧眼があったことにする】
僕は鏡の前に行くと…イケメンがそこにいました。
「えっ…これ僕！？」
『ご主人なかなかだぞ？もともと容姿がいいからな』
「うん、ありがとう？」シロはよく分からないが褒めてくれたのだろう
「よし、ではでかけようかな」
『ご主人私は連れていってくれないのか？』シロは寂しそうな表情で言ってくる。
「そうだな～そのままの姿じゃまずいから…そうだシロを人間にすればいいのか」
【シロを人間であったことにする】

シロはみるみる人の姿になった。銀色の瞳に腰まである髪、整った顔立ちの女の子になった。

「ではご主人早速行くぞ」

「いやいや、待とうよその姿で外に出たらいくらなんでもまずいよ」

シロは裸だったのだ。それはさすがにダメだよね。

僕は魔法でワンピース、と男用の服をだした。ついでに僕の分も出した。

「ご主人ゴワゴワする、脱ぎたい」そう言って脱ごうとする

「いや、脱いだら城下町につれていけないよ？」

「…わかった我慢する」

「では、城下町に出発！」

僕とシロは城下町に向かった。

城下町についた。人目のつかないところに瞬間移動したけど…女の子が三人組の男の人に絡まれていました。

「いいじゃねぇか、オレらといいことして遊ぼうぜ〜」下品な笑みを浮かべていう。

「や、やめてください」

「いいじゃんすこしグベバッッ！！」僕はとりあえず殴った。…理由はキモイから

「な、なんだこのガキは！！ぶっ殺してやる」二人目の男…いや、変態二号は僕に殴りかかってくる。

しかし、シロが殴ってくる手を利用してそのまま、捻って手首を折った。ベキッ！って音が路地裏に響き。

「ギャーーー！！腕、俺のうでゲブッ！」シロは男の腹を蹴り上げた…7m位飛んでそのままグシャっといって地面に落ちてきた。…シロ容赦ないね〜

変態三号は逃げようとしたが、シロに捕まり、ボコボコにされた。…ご愁傷さまです。

「大丈夫？」僕はうずくまっている女の子に優しく声をかけた。

「あ、はい私は大丈夫ですけど…そのありがとうございました」

可愛らしい女の子でした。…この世界はかわいい子しかいないのか

な～？

「あ、あのお礼がしたいんですけど…」女の子は遠慮気味に言ってくる。

「え～っと城下町を案内してほしんだけどいいかな？え～と」

「あ、申し遅れました。私はティア＝トーエルと申します。ティアで構いません」

「僕はシュウ、シュウでいいよ」

「私はシロだ私もシロで構わない」

「よ、よろしくお願いします。シュウ、シロ」ティアはペコリと一礼する。

「よろしくねティア」

「よろしく頼むティア」

僕たちは案内をしてもらうことになった。

「とりあえず、道具屋から行ってみます？私の父が経営しているんですよ」

「そうなのかい？じゃあぜひお願いするよ」

「はい、わかりました」ティアは嬉しそうに言った。

道具屋について店に入ると、大柄の男の人がいた。

「おお、ティアおかえり、その人たちはお客さんかい？」

「はい、そうです。男の人に絡まれているところを、シュウとシロに助けてもらったんです」

「そうだったのか！ありがとうな娘を助けてもらって！」

「いえ、こちらこそ娘さんに町を案内してもらったわけですし…」

「ガッハハ！若者が謙遜するもんじゃないぞ？今日は娘が助けてもらったんだサービスするよ」

「ありがとうございますえ～と」

「ガイだ。よろしくなボウズ、嬢ちゃん」

「はい、よろしくお願いします」

「よろしく頼む」

僕は並んでいる商品を見た…やくそう？

「これ一ついいですか？」

「やくそう？まぁいいがそんなのでいいのか？」

「ええ、これがいいです！」

「一つ1銅貨だがもう一つオマケでつけてやる」

「ありがとうございます」

僕はさっそく、やくそうを食べた。

「「「えっ！？」」」三人に何故か驚かれた。

「マ、マズイ…」味は苦くて美味しくなかった

「ボ、ボウズ何をしているんだ」

「シュ、シュウどうしたんです！？」

「ご主人、頭を打ったのか？」

三者三様の言葉を並べた。…何か間違えた？

「食べたら、回復するんじゃないの？」

「ボウズ、やくそうは、すりつぶして傷口に塗るもんだ。一体そんな知識どこで仕入れた？」

「…自己流？」

みんなに笑われた…何で～？

三城　麻衣　視点

ここに、来てからお兄ちゃんはず～と忙しいそうだ。城内を歩き回ってメイドさんたちに食べ物もらったり、騎士さんたちの指導をしたり、お偉いさんたちの悪行を摘発したりなど、この国にとってなくてはならない存在になったりしてる。…前半は置いといて

とにかく、私の相手をしてくれていない。…寂しい

お兄ちゃんに会いたいな～と思っていると、私の目の前に金髪碧眼の王子様？がいろんな食べ物を抱えていた。

「誰？不審者？」私は警戒体勢をとる。

「ひどいな～実の兄に対してそれはないよ～」

「へぇ！？お兄ちゃん！？」私はかなり慌てた。目の前のイケメンが…いや、元の容姿から納得した。

「これ、おいしいよ～」そう言いながら私に食べ物を差し出す。

「ありがとう…じゃなくて、なんでお兄ちゃんがここにいるの！？」

「麻衣の声が聞こえた～っと思ったらここにいた」

「…私そういえば、お兄ちゃんがここに居ればな～って思ってた」

「…ねぇ、麻衣今ほしいものない？」突然聞いてきた。

「えっ？ほしいもの？…そうだな～ここに来てお風呂入ってないからお風呂に入りたい！」

ここの国は湯船につかると言う習慣がなく、湯浴みしかない。

「それを自分の中で創造してみて～」

「えっ？うん」

私は言われるままに、広～い湯船を創造した…えっ！？

自分の目の前に広～い湯船が広がっていた。…どういうこと？

「たぶん、麻衣の魔法は創造するだけで、なんでもできるんじゃない？」

「…すごいね」それしか言葉が出なかった。

「とりあえず、入ったら？」

「いや、丸見えだからね！？ここ中庭だよ！？」

「作ればいいと思うけど…」

「あっ！そうか」

私は創造して大浴場みたいな家を作りました。

「男湯、女湯も作っておいたから」私がそういうとお兄ちゃんはとても喜んでいた。

「マイ〜！これはいったいなんですか？」レイが中庭に走ってきた。

「お風呂だよ。入ってみれば分かるよ。一緒に入る？」

「ええ、ぜひ。マイその隣のお方は？」

「お兄ちゃんだけど？」

「えっ！？マイにはもう一人お兄ちゃんがいたんですか！？」

「レイ、僕だよ。シュウタだよ。やっぱり、こんなイケメンだったら、わからないよね」お兄ちゃんは落ち込みながら言う。

「いえいえ！！ち、違うんですよ？かっこよすぎて、じゃなくて、ああ、もう」レイが壊れていた。

「とりあえず、入ろうよ？ね？」私は悪い雰囲気を壊すため促した。

「うん、そうだね。ってあっ！！シロを忘れてた！！」お兄ちゃんはそう言って城の中に走っていった。

…こうして、私は自分の魔法について分かった。…【創造魔法（クリエイト）】と呼ぶことにした。

浴場は人気があがり、美肌効果があるとのことで、女性達には大人

気であったため、もう二、三個作った。

あのあと、お兄ちゃんが頭にシロに噛み付かれながら戻ってきたのはどうしてだろう？

8話　契約と能力（後書き）

妹はチートを手に入れました～それに気付くお兄ちゃんは何者？

9話　パーティー（前書き）

累計ｐｖ１１９３９　ユニーク２１３７人　ありがとうございます。
これを糧に精進していきたいとおもいます。

ちなみに前回シロちゃんの口調が、契約の後変わっているの気付きました？

9話　パーティー

三城　秀太

パーティーそれは、楽しめるのもの。

パーティーそれは、お偉いさんたちの顔のうかがいあい。

パーティーそれは、人々の交流をはかり、出会いの場。

「お兄ちゃん準備できた～？」

「できてるよ。それじゃ、行こうか」

麻衣は白のドレスに包まれて、綺麗な清楚のイメージを出す。うんうん、さすが麻衣。

僕？黒のタキシードだけど？説明いらないでしょ

麻衣をエスコートしながら、会場に入る。

「ミシロ　シュウタ殿　ミシロ　マイ殿、お入りになられます」執事さんの声で扉が開いて、中に入る。

「綺麗～天使みたい」

「女神様みたい」

「素敵～嫉妬するわ～」

会場が麻衣を見てざわつく。男の人たちは口をポカンっと開けたまま立っていた。

ダンスのお誘い多そうだな～僕は苦笑いしながらその様子を見ていた。

「これは、これはシュウタ殿お久しぶりです。マイ殿もご機嫌麗しゅう」側近さんが話しかけてきた。

「お久しぶりです。え～と」

「これは失礼いたしました。アーサー＝ノーウェルと申します。どうぞアーサーとおよびください」

僕たちはアーサーとの挨拶を済ませ麻衣をレイのところに行くように促し。本題に入る。

「誰にも言ってないよね？」

「もちろんですよ。そんなことを言ってしまっては立場が危ないでしょう？」

「僕だけでなく、他の人達に被害がおよぶのは嫌だからね」

「分かっておりますとも」

「あなた意外に顔がわかる人は？」

「私とナーレス様だけですね。大丈夫ですナーレス様には見つけても声に出さないように言っておりますので」

「あ～、僕が倒れて目が覚めたときにいた王女様のことね」

「そうでございます。あの、マイ様がお困りの様子ですが…」

麻衣の方を見ると男たちに囲まれていた。…さぁ狩りの時間だ

「失礼します」僕はそう言って麻衣のもとに行き、騎士の務めを果たした。…殴ってないよ？

しばらくしたら、ナーレスが出てきて出てきてみんなに向けて挨拶をする。

「お集まりのみなさん、今日はこのような会に来ていただき誠にありがとうございます。本日は魔王を倒されたシュウタ様が来ておられます」

「がはっごほっ！」喉にジュースを詰まらせた。

会場がざわつく。アーサーを見たら、唖然としていて、放心状態だった。

「今回、魔王を倒されたシュウタ様に乾杯」そう言って締めくくる。

「ちょっと、具合が悪くなったから、席を…はずせませんよね」麻衣とレイの形相に何も言えなくなった。

「お兄ちゃん、ぜ～んぶ話そうか」麻衣がにこにこで言ってくる。…あれ、死亡フラグ？

「シュウタ？全部話したほうが身のためですわよ？」レイもにこにこで言ってくる。…目笑ってないよ

「何を言ってるんだい？話すことなんて何もないよ」無駄な抵抗をこころみる。

「お兄ちゃん？私の魔法どんなのか知ってるよね？ほとんど何でもできるんだよ？」

「そ、そうかいでも「【自白】」ああ、実は魔王倒したの僕なんだよね」途中、麻衣に魔法をかけられた。

「どうやって、倒したの」

「何いってるんだい？た「【自白】」僕の【終始魔法（エンディレス）】でだよ」…もう諦めた。

「それは、一体どんなのです」レイが聞いてくる。

「ここで、話すのはマズイ、あと、麻衣ここで魔法つかっちゃダメでしょ？」

「ごめんなさい」

…とりあえず、いろいろな人が麻衣の魔法を聞いたみたいだし、俺たちに関する記憶を消すか。

【スフィード王国以外の人達に僕たち二人に関する記憶を消す】

一見変わってないように見えるが、これで、魔王が僕が倒したこと、麻衣の魔法のことも消えただろう。

「お兄ちゃん、何をしたの？」

「とりあえず、二人とも僕について来て」

会場を出るとシャルがいた。

「シャルこんなところで何をしているんだい？」

「いや、そ、その、何でもない」

シャルは赤色のドレスに包まれていて、大人の女性を存分にだしていた。

「綺麗だね～中に入ったら誰もが話しかけてくると思うよ？」

「そ、そうか！ありがとうシュウタ」シャルは顔を赤くしながも喜んでいた。

「そうだ、シャルにも話したほうがいいね。ついて来て」

――――――

三城　麻衣　視点

「お兄ちゃん、で【終始魔法(エンディレス)】って何？」

お兄ちゃんが淡々と説明をして、それを聞いた私たちは青ざめた。

「それでは、シュウタは国を消せるんですか！？」レイが驚愕しながら言ってくる。

「消せるって言う確証があるだけで、僕の【魔力】が持つかわからないよ」

「お兄ちゃんは【魔力】なかったんじゃないの？」

「…僕の中に何かがあるんだけど、それが何か分からないから【魔力】って仮定してる」

「シュウタ、お前はさっき会場にいる人達の記憶を消したが良かったのか？」シャルが心配そうに言う。

「僕だけが狙われるのは別に構わないけど、僕のせいで他の人は巻き込めないよ」

「しかし、魔王を倒したことも、思い出もなくなるんだぞ？」

「問題ないよ。所詮、僕に関しての記憶だしどうでもいいと思うけど？間違ってた？」

「「なっ！？」」レイとシャルは驚いた。

「心配しなくていいよ。麻衣だけに危害を加えなければそんなことしないよ」

またか～お兄ちゃんまだダメなんだね。

「シュウタは…他の人達にとって、大切な人かもしれませんよ！？」

レイが叫ぶ。

「…麻衣かレイどっちかを選ばないとどちらかが死ぬ。というのがあったとしよう」

「お兄ちゃんもうういいよ。そこまで」私はそこで止めた。

「麻衣？どうしたんだい？」不思議そうにこちらをみてくる。

「レイ、お兄ちゃんはそんな状況に絶対にさせないし、ならないよ」

泣きそうなレイにそう言う。

「たとえそんな状況になったとしても、絶対最後の最後まで二人が助かる方法を探すと思うよ」

レイはその場から、走り去っていった。

「レイ様お待ちください」シャルもそう言いながら、レイに続いた。

そして、お兄ちゃんと二人っきりになった。

「どうして、あんな突き放すこと言ったの？」

「…自分との距離を縮めてくる前に突き放したほうが楽かと…」

「お兄ちゃんのバカ！！なんで気づかないの？」

「気づかない？何を言ってるんだい？」本当に気づいてない様子だった。

「…レイに聞いてみたら？お兄ちゃんのことをどう思っているか？」

「レイに？僕のこと？」

「そう、聞いてきて今から！」そう言って私はお兄ちゃんの背中を押す。

三城　秀太　視点

レイに聞けって言われたけど、どこにいるんだろう？会場に再び入り、レイを探す。

「いた」レイは外のテラスで空を見上げていた。

「レイちょっと話したいことがあるんだけど」

「シュウタさっきあのようなことを言って、よくレイ様の前に現れたな」シャルは静かに怒っていた。

「シャル、席をはずしてもらえませんか？」レイが言う。

「しかし…わかりました」シャルはそう言って出て行った。

「話ってなんですか？」…ちょっと怒ってる？

「さっきはごめん、言いすぎたよ」僕はそう言って頭を下げる。

「いえ、もういいですわ」レイはそう言ってこちらを向く。

「えっと、そのレイは僕のことどう思ってる？」

「えっ！？へっ！？いや、その…」かなりうろたえていた。

「やっぱり、嫌いなのかい？」

僕がそういうとレイは抱きついてきた。

「そんなはずがありません。私はシュウタのことは好きですよ。大切な人です」

「そうなんだ…ありがとう」

僕はまた、人を信じていいのだろうか？

こうしてパーティーは幕を閉じた。

9話　パーティー（後書き）

お兄ちゃん何があったんでしょうか？

１０話　過去と決意（前書き）

スイマセン、今回は短いです。

１０話　過去と決意

三城　秀太　視点

過去、いい思い出や、思い出したくもないものさまざまある。
今回は僕の過去について、話そう。

僕には生まれつきの、呪いがある。それを僕は【戦者（ファイズ）】とよんでいる。

これは二段階に分けられていて、一段階目は本気を出そうとするときに出るものでシャルと戦ったときにでるやつだ。
これは【冷者（アイス）】とよんでいる。このときの僕は集中力がかなり上がり、冷静に対応できる。

二段階目は戦闘でテンションが上がってきたり、感情が爆発したときに出る。
これを【狂者（バーサーカー）】とよんでいる。
これはただ純粋に戦闘を楽しみ、戦闘以外どうでもよくなる。対象が倒れる、戦闘不能になるまでいたぶる。

正直いらない。これが分かったのは、５歳の頃で自分の家の道場でなったらしい。そのときのことは覚えていない。

言い忘れていたけど、僕の家では道場をしている。国公認の武術で警察や警備関係の人が多い。…女性もなぜか多い。

僕の父は僕とよく似ていると言われる。兄弟？と間違われたりしたりする。性格も同じらしい。…自分ではよく分からない。

僕の母は麻衣とよく似ていて、姉妹？によく間違えられる。いつもにこにこだけど怒った時は、世界で一番強い父を子供扱いするほどになる。…怖すぎる。

僕は守らないといけない約束がある。

1、家族が本気を出していいと許可しないと出してはいけない

2、むやみに戦闘をしてはいけない

3、自分が危険な時、困っている人を助けるときは使っていい

これをいつも守っている。

家族はみんな優しくて、大好きだ。僕はずっと守りたいと思う。

だけど、友達はいらない。あんな辛い思いをするくらいなら、作らないほうがいい。

あれは、中学二年生の時だった。僕は放課後忘れ物を取りに教室に戻っていた。

ドアの向こうに人がいたので、声をかけようと思ったがみんなが真剣に何かを話していたのでそれが終わるまで、廊下で待っていようと思った。

教室には小学校からの親友T君と数名の男子がいた。

「なぁ、あいつのことどう思う？」　T君が言った。

「あいつ？ああ、三城のこと？」

「ああ、俺あいつのこと嫌いなんだよね～」僕はこのことを聞いて、驚いた。

俺も俺も～っとみんなT君に賛同していた。

「だって、あいつがいるとさ～好きな子、み～んなあいつのところにいくんだぜ？」

「しかも、仲良くしないと女子に睨まれるしな～」

何で？僕は疑問に思う。みんな、楽しそうに笑うし、小学校のときも同じだったのに…

「あ～あ、あいつ消えてくれないかな～転校でもいいからさ～」T君がそんなことを言う。

みんながぞろぞろと教室から出てきた。

「しゅ、秀太？お前まさか…」T君が驚いていた。

「僕は、みんなのこと友達だと思っていたけど、僕の勘違いみたいだったね」

「違う！そ、そんなことはない。あ、あれはおふざけだ」そう言ってくるが、そうは思えなかった。

「…もうどうでもいいや」僕はそう言って、走ってその場から逃げた。

何かT君が言ってくるのが聞こえたけど、無視をして学校を出た。

小学校からみんなと一緒に遊んでとても楽しかった。中学校もそんな感じだろうと思っていたけど、どうやら違ったみたいだ。

夜になるとT君から電話がかかってきた。あまり出たくなかったけどでた。

内容は今までと変わらないで接してほしい。…ふざけるな、僕はそう言ったがT君は泣きながら、懇願してきたので承諾した。

次の日の学校、苦痛でしかなかった。嘘、嘘、嘘、偽りの世界でしかなかった。

僕は自分に嘘の仮面をつけた。いつしか僕は嘘をつくのが得意になってしまった。

僕は考える。この世で本当の絆はあるのだろうか？

そして、僕は見つけた。そう、家族だ。

いつも、みんな優しくしてくれたし、傍にいてくれた。

そして、家族を守ることを決意し、嫌だった道場の稽古をした。感情のコントロール、近接格闘の技術を学んだ。

麻衣が中学生になったあたりから、いろんな男が絡むようになったので、僕は全てから守った。そして、稽古をつけて半年、当主である父を越した。

父は笑いながら「僕の数十年がこうも崩れるとはね」と言っていた。…少し寂しそうでもあった。

そして、僕は心に誓う。家族を何があっても守り、助ける。

それが、僕の定めだ。

『いい話だったわ』黒髪黒目の女の人が言う。

――なんで、ここに僕がいるの？てか、いつから聞いてたの？

『最初からずっと聞いてたわ』

――――恥ずかしいな～

『でも、辛い過去があったのね』女の人が悲しそうな表情で言ってくる。

――――そうかい？

『私はあなたを裏切ることなんて絶対にないわ』

――――ありがとう、うれしいよ…そろそろ名前ないと不便だね。

『聞けるかしら？私の名前はローズ――――――よ』

――――ローズだけ聞こえた。

『ホントに？うれしいわ、私のことはローズでいいわよ？』

――――わかったよ、ローズ。最近ここにいる時間が延びたような？

『ええ、延びているわ。これもあなたのおかげね』うれしそうに言ってくる。

――――ねぇ君はいったい何なの？

『私はあなたを助けるため、ここにいるの』

――――この間言っていた。【七神柱（セブンスゴッド）】って何？

『それは、組織の名前。私を閉じ込めた組織よ』

――――そうなんだ。…それじゃここの異世界から帰る方法は？

『ごめんなさい、それはわからないわ』悲しそうに言った。

――――そうなんだ。じゃ、自分で探すしかなさそうだね。

『私もできる限り協力するわ。そろそろみたいね。じゃあまたねシュウタ』

――――またね～

僕は意識をおとした。

目が覚めると夜だった。え～と昼から寝てたから…かなり寝たね。

ここは、自分の部屋だ。あのパーティーから八日過ぎている。今日の昼に城についてそのままばたりとベットで寝てしまった。

んっ？窓の外に人影が…

僕は気になって、窓を開ける。するとそこには、ふわふわ浮かんでいる。青髪青目の少年がいた。

「はじめまして、シュウタ。僕は【七神柱（セブンスゴッド）】水柱所属（ウォータネス）　ケイブリッチ＝スワンだよ」

「…【七神柱】がいったい何のよう？」

「君を組織に入れにきた」

「僕にその組織に入るメリットは？」

「願いを一つ叶えてあげるかな」
「もとの世界に帰るは？」
「ん～、それはわからない君たちをよんだのは組織だし」
「…君たちの組織が僕たちを呼んだ？」
「正確には、君だけをよんだつもりだったらしいけどね」
「なんのためにこんなことを？」
「さぁ～？たぶん暇つぶしなんじゃないかな？上の人たちが考えていることなんて知らないよ？」
「暇つぶし？そんなことのために、ここによばれたのか…」
「まぁどうでもいいじゃないか、それよりどうするの？」
「断る。そんな狂った組織なんかに入りたくない」
「そうかい、残念だね～。まぁ、今回は話合いだけが目的だしこれで失礼するよ」
「逃がすと思う？」
「捕まえれないと思うよ？」
【その存在をなかったことにする】

消えた。と思ったが正体は水だった。…あれは水でできた分身だったんだ。

でも、いろいろと分かったことがある。…とりあえず、【七神柱】なんか帰る方法を知ってそうだな。

――――僕をよんだことを後悔させてやる。

１０話　過去と決意（後書き）

９／２６　嫌だった。→嫌だった　に修正しました

11話　依頼を受けよう

三城　麻衣　視点

最近、お兄ちゃんの様子がおかしい。あの、パーティーから帰ってきてから何か隠している気がする。

心配なので、監視の魔法をお兄ちゃんにばれないようにかけた。

大丈夫かな～？お兄ちゃん…

三城　秀太　視点

とりあえず、【七神柱（セブンスゴッド）】について色々と調べまわったが、手がかりがない。

少数派で動いているのだろうか？それとも、別の組織の名前で動いているのか分からない。目的がはっきりとしていれば探しようもあるが…

『ご主人、少し休んだらどうだ？』

「いや、大丈夫だよ。心配しないで」

『そうか、でもあまり無理はしないでほしい』

「ほどほどにするよ。…それよりもこの国では情報が得られないか

ら、この国を出ようと思うんだけど」

『そうか、私はご主人の意向に従うよ』

「そのためには、武器をそろえなきゃな～」

ナイフを持っているが、これ一本というわけにはいかないだろう。

「作るしかないかな～。…やってみるか」

【刀と銃があったことにする】

僕がそう唱えると刀が出てきたが…あれ？銃…は？

そのまま、意識を失った。

『ご主人！ご主人しっかりせんか』

そんな声が聞こえてきたので、ゆっくりと目を覚ます。

「あれ？何で寝てたの？」

『…たぶん、【魔力】が一時無くなったのだろう』

「なくなったのか～。二つ同時は難しかったかな～」

『一つ分できる【魔力】がご主人の今の限界なんだろうな』

「そうなんだ～まだまだだな～」

『その剣は使えるのか？』

「ああ、多分大丈夫なんじゃないかな～。僕が愛用していた刀と同じだし」

『ほう、そうなのか、ご主人の国は変わってるな』

「とりあえず、実戦で使ってみたいな～。あとお金も稼がないといけないし」

『なぜお金がいるのだ？』

「それは、この国を出るからさ。お金は旅にはいるだろう？」

『そうか、ではギルドに行ってみてはどうだ？』

「ギルド？もしかして、依頼をこなしたら報酬がもらえるやつ？」

『そうだ、行ってみるか？ギルドに』

「うん、行ってみよう。実戦で刀使えて、お金も稼げる。一石二鳥だね」

『しかし、ご主人はお金も作れるのでは？」

「…そうだった。そうだよね～」

『ご主人、考えればすぐわかるのでは？』

「でも、今は【魔力】ないから無理だね～。ギルド行くしかないよ

～」

『あいかわらずゆるいなご主人』

「ありがとう？…とりあえず、人の姿になって～」

『褒めてないぞご主人、まぁいいか』そう言って人の姿になり、服を着る。

シロに魔法をいちいちかけるのは、面倒なので人の姿になれるスキルをつけた。これは人の姿になっても、普段の身体能力と変わらない。

ついでに僕も金髪碧眼に変わる。

「では、行くかご主人」

「りょ～かい」

僕は瞬間移動でギルドに向かった。

ギルドに着き、中に入るとたくさんの人で賑わっていた。

受付の女の人の所に行き、説明を受ける。

ギルドには、ランクがありG、F、E、D、C、B、A、Sと分かれており、ある特定のギルドポイントが溜まるとランクが上がる。

Dは一般でCがベテランと言う感じで、Sは国に数人といったところらしい。依頼はG～Dは誰でも受けれる。C～AはD以上が受けれる。

当たり前だが、死んだら自己責任だ。

「こちらが、証明書です。なくしたら、再発行に5銀かかります」

僕とシロは生徒手帳くらいの大きさの証明書を受け取る。ちなみに登録した名前はそれぞれ、シュウタとシロだ。

「あちらがギルドの依頼の掲示板です。あちらから持ってきてください」

「わかりました」

僕達はさっそく依頼をさがす。…なんだこれ？

僕は張り紙をじっと見る。

ランクD　討伐　グリンポス

報酬　4金貨　　パーティー必須

これは、みんな宛という感じかな～。パーティーかどうしようかな～？

「あんた達、この依頼を受けるの？」そんな声が聞こえたので振り返るとブロンドのポニーテールの少女がいた。

「そうしようと思ったけど…パーティーが…」

「ならよかった！！私も今探していたの！！」いきなり手をつかまれる。そしてシロに睨まれる。…どうして～？

「と、とりあえず落ち着いて？君は一人なの？」

「いいえ、もう二人いるわ！よかった数が揃えば勝てそうだし」

そのまま、少女に手を引かれ、仲間のもとに連れて行かれる。

美少年とフードを被った少女？がいた。

「紹介するわ、こっちが私の兄のアレクスと妹のライムよ」

「はじめまして、兄のアレクスです。よろしくお願いしますね」爽やかボーイ、イケメンボーイのアレクスに挨拶される。

「わ、私はライム…です」フード越しからちらっと顔が見えたが、顔整ってましたよね？

「そして、私がファンよ。短い間だけどよろしくね」

「僕はシュウタ、こちらこそよろしくね」

「私はシロだ。よろしく」

この三兄妹さんはみんな、顔が整ってますね～。僕ら兄妹と大違い。…イケメンいいな～

「あの～イケメンいいな～ってあなたの方が顔整ってますよ？」アレクスがわけが分からないことを言ってくる。

「ありがとう。お世辞でもうれしいよ」

「いや、あの…」

「アレクス、この人に何を言っても無駄だぞ？」シロが言う。

「…シュウタ、あんたもしかして天然？」ファンが言う。

「天然？どう見ても違うと思うけど…」

「…そう、でも今の発言で確信したわ」

「そうかい？」

「…とりあえず、今後について話し合おう」アレクスが言う。

出発は明日の明朝で集合場所はここの外、馬車はアレクスが用意するらしい。

「じゃあ、今日は解散ね。また明日」ファンはそう言うと兄妹たちと出て行った。

「とりあえず、銃が作れそうだね～明日までなら」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろう」

「わかった」

僕たちもギルドを出て瞬間移動で部屋にもどった。とりあえず、明日は出かけるね～っと麻衣とメディアに伝えた。

麻衣は私も行く！！っと言ってきたが今回はダメ～っと言ってあきらめさせた。…二時間かかりましたよ？

部屋に戻って、銃を作った。ハンドレーザーガンにした。威力はどのくらいか知らない。…ダメだよね？

すべて明日しだいということで、寝ようとしたら、レイが入ってきた。

「あの～、一緒に寝ていいですか？」何故か顔が真っ赤だった。

「いいけど…眠れないのかい？」

「は、はいそうです。そうなんです」しきりに首を縦に振っていたが顔は真っ赤のままだ。

「どうぞ～」そう言って隣をあける。

「し、し、失礼します」そう言って横に入る。

「じゃあ、お休み～」

「えっ！？はいお休みなさい…ぐすんっ」

僕はそうして眠りに着いた。…ベットの下からものすごいプレッシ

ャーがきたが、なかったことにした。…平和が一番

次の日の明朝、レイを起こさないようにそ～っと抜け出して、城を出た。

…部屋を出る前シロに頭を噛まれた。痛かった。どうして噛んだの？っと聞いてもそっぽを向いて教えてくれなかった。

「おそ～い！！なんでおくれたのよ！！」ファンが怒ってた。

「いやシロに…僕が寝坊しました」シロに睨まれたので言い直す。

「あんたね～…まぁいいわ、早く乗りなさい！」

「おはようございますシュウタ」アレクスが声をかけてくれた。

「おはよう、アレクス」

「その、お、おはようがございます。シロさん」顔を少し赤くしながら言う。…フラグたったね～

「ああ、おはよう」シロは気付いていない様子だった。

馬車に乗り込むとフードをとったライムちゃんがいた。

「おはよ～う」

「…おはよ」小さく挨拶を返してくれた。

「さあ、出発！！」ファンの号令とともに馬車が動き出す。
ちなみに、アレクスが運転してくれてる。

「ねぇ、そういえば、なんで三人で旅してるの？」僕は言う。
「旅ではないわ、修行よ」ファンが言う。
「修行？それは強くなるため？」
「そう、強くなって憧れの魔法騎士団に入るのよ！！」
「三人とも？」
「いや、ライムは宮廷魔法師、アレクス兄は騎士団よ」
「お、お姉ちゃん、恥ずかしいからあんまり言わないで…」
「あら？いいじゃない、減るもんじゃないし」
「そ、そういうことじゃなくて…」…苦労してるなライムちゃん。
助けてあげよう。
「へぇ～三人とも立派だね～。なんでまたファンは魔法騎士団に？」
「隊長のシャーサル様に憧れているからよ！…でも最近誰かに負けたって聞いたわ」

「負けたんだ〜。一体誰に負けたんだろ？」…僕かな？

「知らない、けど、勝ったやつはインチキに決まってる。私がぶっ倒してやる！！」目をギラギラ燃やしながら言ってきた。

「応援するよ。頑張ってね」

「うん！ありがとう。…そういえば二人はどのくらい強いの？できれば戦ってみたいな」わくわく顔で言ってくる。

…魔王は直接すぎだし、てか魔王の名前なんだっけ？ハーレムだったし…それでいいか

「ハーレム王より強いよ」

「誰よその人！？基準が分からないわよ！！」

「…変態王とも言う」付け加えておいた。

「知らないわよ！！あんた何言ってんのよ！？…シロは？」僕をじと目で見てシロにふる。…正直に言っただけだよ。

「変態王の次に強い」シロはどうやら分かってくれたようだ。

「…私、選ぶ人間違えたかしら…」目頭を指で押さえながら言う。

「シロちゃんはそういえば普通の服なの？」ライムちゃんが言う。

「動きやすいからだ。…本音を言えば服もいらない」

「えっ！？はっ！？」ライムちゃんは顔を真っ赤にしていた。

「ご主人が無理やり服を着せたんだ」

「ご、ご主人！？あ、あんたそういう趣味？」ファンが蔑んだ目で見てくる。

「いや、シロがそう言っているだけで、僕が呼ばせているわけじゃないよ」

「うむ、そうだ。…ご主人、その…今度からシュウタと呼んでいいだろうか？」

「うんいいけど、それは別に」

「そ、そうか！ありがとう」なんか、かなりうれしそうだ。

「しかし、普段から着てない服を急に着るのはなれないものだな」

…そこでそれを言います？

「「ッ！！」」二人とも声にならない声を出して、ファンがシロを抱き寄せながら僕から離れる。

「シロ…あんた普段は服着てないの！？」

「ん？着てないが、それが普通ではないか？」

「…最悪最低、女の敵！！変態王はお前だ！！！」めっちゃ睨まれ、怒られました。

「こいつ、降ろそう！！今すぐ降ろそう！！」

「まてまて、誤解だ。いろいろと間違っている」

「間違っているのは、お前だ～～～！！！！」

「…シュウタ最低」ライムちゃんに、ぼそっと傷つくことを言われた。

アレクスには聞こえていないからよかったのかな？

１２話　依頼を受けよう２（前書き）

最近、テスト勉強が忙しすぎて死にそうです。

１２話　依頼を受けよう２

三城　　秀太　視点

二時間ほどしてから、馬車を降りて今は森の中を歩いている。

「あの…その…」僕はそう言って声を何度もみんなに掛ける。

ギンッ！っと何回も睨みつけられています。…誤解だよ～？

今は馬車を降りて、森の中を歩いている。グリンポスは森に生息しているらしい。

「シュウタが何かしたのか？みんな様子がさっきからおかしいぞ？」シロが困り顔で言う。

「いいんです！何も言わないでください。まさかこんな人とはおもいませんでしたよ！」アレクスが僕を軽蔑な目で見る。

馬車を降りた後、ファンが僕が変態王と言うことを伝えた。アレクスはシロを僕から守るように行動をする。

誤解なんですよ～っと何回も言っても聞いてもらえず。５ｍくらい離れたところからちょこちょこ僕はついていってる。

ついでに、図書館で調べた売れる薬草を見つけるので結構うれしい。

「いた！！あそこよ」ファンが指で示す。

指を示した先には、体長５ｍの緑色の恐竜がいた。

「作戦を立てるわ…あんた抜きで」僕を睨みながら言う。

「なぜシュウタを除け者にするのだ！それはおかしいぞ！」ついにシロが怒った。

「あの人はあなたに変態的行動をさせていたのよ！？どうしてそれがわからないの？」ファンが言う。

「服を着ていないのが何が悪いと言うのだ。私はシュウタを味方するぞ！！」

「…あなたそこまで洗脳されているのね」

「シロさん、大丈夫ですよ？僕がいますから、あの人をここから追い出しても構いませんし」アレクスが言う。

『シュウタもう我慢ならん！！あのことを言っていいか？』シロが念話で伝えてくる。

『ダメだ。僕はいくら貶（けな）されてもいいからよ。シロがこのことで危険になるよりいいよ』

『お前は悔しくはないのか！？』

『悔しくないよ。どうも思わない』

『…そうか、わかった』そう言ってシロがしょんぼりとする。

「お、お姉ちゃんあれ！！」ライムちゃんが急に叫ぶ。

「あ、あれは…グリーンドラゴンだわ！！」

全長は５０ｍくらいある緑色のドラゴンだった。

グリーンドラゴンはグリンポスの前に着地して、ガブリっとそのまま食べた。

そして、こっちに顔を向ける。…僕たちおいしそうですか～？

「ギャオオオオォォォォォ！！！！！」っと咆哮をあげてこっちに走ってくる。

「やばい、みんな逃げて！！」ファンがそう言ったのと同時にみんな走り始める。

しかし、ドラゴンのほうが足がはやく、３００ｍくらいの距離が２００ｍくらいになっていた。

「きゃ！」そう言ってライムちゃんがこけた。

「「ライム！！」」アレクスとファンがライムちゃんに駆け寄る。

そうしているうちに１００ｍくらいになる。

「私たち死ぬのかな…嫌だよ…」ファンが涙を見せる。

「死なないよ」僕は言う。

「えっ？」ファンがこちらを見る。

「僕が死なせない。困った人は助ける！！」僕はそう言って刀を抜き、５０ｍ先にいたドラゴンの片足を速攻で斬る。

ドラゴンはそのままバランスを崩し横に倒れる。

「おい、トカゲ野郎。…そのままでいたほうがいいぜ？」【冷者（アイス）】になった俺は言う。

「ギャオオォォォ！！」片足ながら立ち上がろうとした瞬間、もう片方の足を斬って、俺はドラゴンの首に移動して首を斬った。

ドンっと首が地面に落ちて、戦闘が終わった。

ファン視点

ライムがつまずいてこけて、駆け寄ったときドラゴンは５０ｍと近くにきていた。

「私たちここで死ぬのかな…嫌だよ」我慢できなくて泣いた。

「死なないよ」そんな声が聞こえた。

「えっ？」

私が振り返ると変態野郎がいた。

「僕が死なせない。困った人は助ける！！」そう言って、一瞬でドラゴンの片足を斬った。

何？あの人？いったい何者？どうやってあそこまで移動したの？

いろいろと疑問が浮かんだが、ドラゴンが立ち上がろうとしたとき、もう片方の足を斬ったと思ったらいつの間にか首まで切れていた。

「ねっ？いったでしょ死なないって」いつもの優しい雰囲気で言ってくる。

「えっ？えっと？その・・・」

「ごめんね？怖いよね、あんなもの見たら」悲しそうな表情で言ってくる。

「ちがっ違うわよ！あなたのこと怖くなんかない！」

「そうかい？ありがとうね。…シロもう帰ろうか」

「…そうかわかった」

「ま、待って！！」私は必死に声を掛ける。

二人は振り返る。

「そ、その…助けてくれてありがとう。それと疑っていてごめんなさい」私はそう言って頭を下げる。

「ありがとうございました。シュウタそれとご迷惑かけてすみませんでした！」

「シュウタお兄ちゃんありがとう。そしてごめんなさい」

「いいよ。気にしてない。兄妹三人仲良くね～」そういって手を振ってくる。

そしていつの間にか姿が消えていた。

またあえるよね？シュウタ

三城　秀太　視点

部屋に瞬間移動してソファに座った。シロはもとの姿にもどって僕の横にくる。

『シュウタ、どうして助けたのだ？助けなくてもよかっただろう？』

「ああ、そうだね。でも世界でたった一つの兄妹でしょ？僕は妹がいるからわかるんだ」

『ほう、それはいったいなんだ？』

「絆だよ。僕は三人の絆が見えたから助けたんだ」

『絆か…私とシュウタにも絆はあるのか？』シロが不安そうに見つめてくる。

「あるよ。ちゃんとある。いつもありがとねシロ」僕はそう言って頭を撫でてあげる。

『ど、どういたしまして』うれしそうに目を細める。

「シュウタ！帰ってきたの？」部屋の外からメディアの声が聞こえた。

「ああ、帰っているよ」

「失礼しま～す。シュウタ帰ってきたのなら声をかけてよ！」顔を膨らませながら言ってくる。

「ごめんよ、次から気をつけるよ」

「あら、声がすると思ったらおかえりになられたんですね？」メープルがそう言って入ってきた。

「シュウタ！帰ってきてたんですか！」レイも入ってきた。

「シュウタ、いたのか。居たのなら訓練に顔をだせ」シャルがレイと一緒に入ってきた。

「ああ、今帰ってきたんだ。訓練は後で行くよ」

「だまっていなくなるから心配したんですよ？」レイが言う。
「一応、麻衣には昨日言っていたんだけど…そういえば麻衣は？」
「お兄ちゃん！？レイと昨日一緒に寝たんだって？」麻衣がそう言いながら入ってくる。
「「「はっ？」」」レイ以外の三人が声をあげる。
「ああ、そうだが…レイから聞いたのか？」
「えっ？私言ってませんよそんなこと」
「えっと…それはその…」ばつ悪そうに下を向く。
「そ、そんなことより、ほ、本当に一緒に寝たんですか！？」メープルが顔を真っ赤にしながら聞いてくる。
「そうだけど…何か悪いのか？」
「…シュウタ、貴様レイ様を連れ込んだのか！？」シャルは剣を抜き僕の首筋にあてる。
「いやいや、レイが眠れないからってきたんだよ」
「レ、レイ様？」
「そ、そのやましいことは何一つされてないし、してないよ！？」
「うらやま…じゃなくて、権力乱用ですね。レイ様」メープルが笑

顔で言う。…目が笑っていないよ？

「いくらレイ様でも、許しがたい行為ですね？」メディアも笑顔で言う。…こわいよ？

「そのまま寝ただけだよ？」

「それでもうらやましいというか」メディアがぶつぶつ何か言った。

「麻衣、私には魅力がないのでしょうか？」

「そんなことはないよ。お兄ちゃんは誰であってもしないから」

麻衣とレイがなんか話していたが聞こえない。

「そうだ！今日はみんなで一緒に寝ましょう」メープルが提案してくる。

「「「「さんせ～い」」」」シャル以外は賛成のようだった。

「レイ様！さすがにそれは…」シャルが言う。

「あれ？シャルは一緒に寝たくないの？」レイが悲しそうな表情をする。

「そんなことはありません！ご一緒させていただきます」即答した。

「んじゃ、ベットとか準備しませんとね」メープルは部屋から出て行った。

少しすると、城の使用人たちがベットを抱えて部屋に入ってきた。

『シュ、シュウタなんの騒ぎだ！？』シロが起きた。…撫でていたらいつの間にか寝ていた。

「今日、みんなここで寝るらしいよ」

『な、なんだと！？』シロはかなり驚いていた。

そして、ベットの設置が完了した。

「これで、みんな寝れますね」メープルが言う。

「シュウタ、訓練に行くぞ」

「ああ、わかった」僕はそう言って部屋を出た。

13話　一つのミス

三城　秀太　視点

「シュウタ…その髪と目の色…変えたらどうだ？」シャルが顔を赤くしながら言う。

「…忘れてたよ」僕はそう言って、髪と目を元に戻した。

フッ～っとシャルが息をついた。

「どうしたの？何かあった？」

「い、いや何でもない！」手を顔の前でブンブン横に振る。

「そう？ならいいけど」

そういいながら、訓練所に向かった。

魔法騎士団の訓練所に着くと、豪華な装備をしているおじさんが見えた。

「シャル、あの人は誰？」

「ああ、また来ているのか。あの人はマイゼル公爵だ」

マイゼル公爵は訓練をしている女の人にべたべたさわっている。

「何あの人？変態さん？」

「ああ、いつも教えてやると言ってべたべたさわってくる。一週間に三回は必ず来る」シャルは怒りながら言った。

「倒さないの？」

「そんなことをしたら、何をされるかわからない」

「…僕が何とかしようか？」

「できるのか？無茶なことをするなよ」

「大丈夫。なんとかできるから」

僕はそう言って、マイゼル公爵に近づく

「むっ？なんだ貴様は？関係者以外立ち入り禁止だぞ？」…あんたもな！っと言うのは堪える。

「申し遅れました。私はシュウタと申します」そう言って軽く一礼する。…頭、眩しいね～光ってるよ～

「シュウタ？聞いたことないな。とっとと立ち去れ！」そう言いながらもしっかり女の人をさわっているマイゼ…いや、太陽さん

…女の人めっちゃ嫌がっているよ～。

「いえいえ、私はたいよ…マイゼル公爵に用があって来たんですよ」

…太陽さんって言いかけたよ～あぶない、あぶない。

「私に？いったい何のようだ？」少し不機嫌に言う。

「私は魔法騎士団隊長さんより強いと噂されるマイゼルさんにお手合わせを願いたいと思いまして」

「ほう、そうだったのか。うん、そうだ私はここの隊長よりも強いぞ！」嬉しそうに言う。

ブチッっと切れる音が聞こえてきそうなほど、シャルは怒っていたが、太陽さんはそのことは知らず。

「いいだろう、私が手合わせしてやろう」めちゃくちゃ上機嫌に言った。…チョロすぎ

「ええ、お願いいたします。マイゼル公爵」

「いつでも来い」そう言って剣を構えないで言う。

「わかりました」

僕はそう言って静かに言う。【対象の胸に剣で刺された痛みがあったことにする】

「ぐあああぁぁぁ！！！」そう言って胸をおさえる太陽さん。

「どうかなさいましたか！？」僕はそう言って太陽さんに駆け寄る。

「胸が…痛い…うぐっ！！」そう言って悶える。

「ここは試合を中断…「いや、大丈夫だ！！もう治った」」

「そうですか、そういえばマイゼル公爵はここに通ってどのくらいになるんですか？」

「むっ？ここに来てから一ヶ月になるが…それがどうかしたのか？」

魔法騎士団ができたのは二ヶ月前だから…おいおい、半分もいたのかよ。

魔法騎士団は女性だけでくまれたものだ。騎士団は男。なぜ魔法騎士団にしたかと言うと、女性騎士団にするとバカにされるかららしい。

僕が会わなかったのは、朝、ここで教えて、昼から騎士団のほうにいくから太陽さんには会わなかった。

「実はですね。ここの訓練所では女の人が男の人に胸を刺されて殺されているんですよ。噂なんですが、ここで女性に対して嫌がらせをしたら、胸に痛みが走って死ぬと言われているんですよ」

サァーっと太陽さんの血の気が引いていた。

「ま、まぁ、わ、私は悪いことはしてないし、関係ないな」そう言いながらも震えている。

「まぁ、そうですよね。単なる。噂ですよね」

【対象の胸に剣で刺された痛みが二倍であったことにする】

「ぐあああああぁぁ！！！！」さっきよりも苦しい表情で叫ぶ太陽さん。

「だ、大丈夫ですか！？マイゼル公爵」

「ま、まさか…わたしは…死ぬ…うわあああ！！！！」そう言ってマイゼル公爵は逃げていった。

「ま、これでここに二度と近づかないと思うよ～」

「「「「キャ～～～～！！！」」」」っと女性人たちは声をあげる

「救世主よ」

「やっと解放されたわ～」

「しかも、軽々とやってのけて」

「かっこいい！！」

そういいながら、僕に近づいて握手したり、頭撫でたりなど、もみくちゃにされた。

「シュウタ…その、ありがとう！！」シャルはそう言って頭を下げる。

「いいよ～今度、なんか困ったことがあったら相談してね～」

「ああ、ありがとう！！」シャルは今まで見たことないくらいの笑顔でいた。

「隊長の笑顔はじめてみた」

「満面の笑み」

「かわいい隊長の一面をみれた」
「その原因をつくったシュウタさんは何者？」
「お前たち！！バカにするな～！！」顔を真っ赤にさせて怒る。
「「「「きゃ～～～～～♪」」」」っとあきらかに楽しみながら逃げていった。
「お前たち～！！訓練は終わってないぞ～！！」
これを機会にシュウタは女の敵を追い払った王子様。
さらにあの魔法騎士団の隊長に笑顔をもたらした紳士という噂が広まり、女性達にさらなる熱い視線を送られることになるのは本人は知る由もない。

三城　麻衣　視点

「あ～あ、またきてるよ～」私は心底うんざりしながら言う。
「また、届きましたね。これで本日、１００個目ですね」メープルはおもしろそうに言う。
「全然うれしくないよ～。はぁ～いつまでくるんだろ」私はそう言ってプレゼントの山を見つめる。
私の気を引くためあらゆるプレゼントが贈られてくる。とってもいらないです。…お菓子はおいしいけど

「そういえば、今日は大臣さんに呼ばれていたんだっけ…」わたしは言う。

「そうだったんですか。でも…あやしいですね」

「私もそう思うから、こらしめようかな～」

「あまりむちゃはしないでくださいね」

「お兄ちゃんほどじゃないから大丈夫だよ」

「ふふっ確かにシュウタは危なっかしい子供ですよね」

「うん、私が見てないと何するかわからないから」

「まぁ、どっちが年上なんだか」微笑みながら言う。

「う～ん、いろんな意味でやっぱりお兄ちゃんだと思うよ」

「しっかりしているところもありますからね～」

「そろそろかな～じゃあ、行ってくるね」

「はい、いってらっしゃいませ」そう言って笑顔で見送ってくる。

「おまちしておりました。麻衣様」そう言って私を迎える…え～と狸さん。

ガチャンっと扉が突然閉まる。

「…なんのまねですか？」私は冷たく言う。

「ぐふふ、あなたを私のモノにしようとね」そう言って下卑な笑いを浮かべる狸さん。

「そうですか、じゃあおしおきですね【束縛】」

私はそういって魔法を放つ。

「ぐあぁ！！」そう言って狸さんは地面に倒れる。

「な、なぜだ。体が動かん」そう言ってもがこうとする狸さん。

「さぁなぜでしょう？【悪夢（ナイトメア）】」

「ぐあああああぁぁ！！！」そう叫ぶ狸さん。

「苦しいですか？」

「も、もう…やめてくれ。頼む！！」そう懇願する狸さん。

「心配しなくても大丈夫ですよ？外から誰も来ませんし」

「ど、どういうことだ！？」

「だってこの部屋に【防音】の魔法をかけましたから」笑顔で言ってあげる。

「た、頼む。悪かった！！こ、殺さないでくれ！！」顔を青くしながら言う。

「殺しはしませんよ？く・る・し・む・だけです♪」

「ギャーーーーーー！！！！！」

私は何回も【悪夢（ナイトメア）】をしてあげました。

なんと、狸さん精神崩壊を起こしました。…やりすぎたかな？

かわいそうなので精神は治してあげました。

私は部屋を出てお兄ちゃんの部屋を訪れました。

「あ、麻衣。シュウタならまだ帰ってきていませんよ？」とメディアが言ってくる。

「いや、今日はシロちゃんに用があったの」

『なんだ？私にか？』

『そうだよ。お兄ちゃんのことなんだけど』私も念話を使う。

『なんだ？シュウタのことか？』

『うん、そうだよ。…お兄ちゃんがこの国をでるって言うのはホント？』

『さぁ？なんのことやら』

『隠しても無駄だよ。お兄ちゃんがお金集めで依頼をしていたのも知っているから』

『…そうだったのか知っていたのか。それで私に何が聞きたい？』

『お兄ちゃんは何を探しているの？』

『…そこまでは知らん。だが危険なことだというのはわかる。本人には聞かないのか？』

『聞いても絶対に教えてくれないよ』

『ふふっ、まぁシュウタらしいな』

『だからあなたにお願いする。お兄ちゃんがこの国を出て行こうとしたら私に教えて』

『監視をすれば、いいのではないか？』

『監視の魔法はつけていたけど、依頼をうけた後消された』

『…うちの主人は規格外だな。私はそんなもの気づかなかったぞ？』

『気づかないような魔法も一緒にかけたんだけどね』

『そうか…わかったお前の要望はしっかり受け取った』

『ありがとう。じゃあまたね』

『ああ、またあとでな』

「…麻衣、ず～っとシロを見つめにきただけ？」怪訝な顔でこちらをみてくる。

「ち、違うよ。会話をしていたんだよ？」

「そ、そう…シロはしゃべっていなかったけど…」痛い人みたいな感じで見てくる。

「念話だよ。ね・ん・わ」

「えっ！？できるの念話？」

『こんな感じかな？』

「あっ！いま麻衣の声が響いてきた！」

「そういうことだよ。じゃあまた後で」

「はい、またね」

三城　秀太　視点

お風呂も食事も済ませて、さぁ寝ましょうかっとなったのはいいけど…

シャル、王女三人、メープル、メディア、麻衣、シロがいるけどみんな僕のベットに入ってくる。…寝れないよ！？

「あの～みなさん。狭くて寝れないんだけど」

「いいではありませんか」

「レイ様もこうおっしゃっているから問題ない」

「シュウタお兄ちゃんだいちゅき」

「シュウタさん、大丈夫です」

「あらあら、いいじゃありませんか」

「シュウタの隣はわ・た・し」

「お兄ちゃん人気者だね」

『シュウタ…次の日はないぞ？』

約一名怖い発言をしてきたけど…何か忘れているような？

「そういえば、今日、ギルドでグリーンドラゴンを討伐してきたと言う人が現れたらしいです」レイが言う。

「それは本当なのですか！？レイ様」シャルが驚いて言う。

「ええ、しかしすごいですよね。Ａランク１０人でやっと倒せる相手を三人で倒すなんて」

「三人ですか…どんな人なんでしょう？」

「明日、謁見がありますのでそのときに見れますよ」…えっ？

「そうですか。楽しみですね～戦ってみたいですよ」シャルが言う。

「頼んだらできると思いますよ」

「そうですね。明日が待ち遠しいですよ」

『シュウタそういえばギルドの登録名はそのままだったよな』

『あっ。そういえば名前教えちゃった』

『シュウタはやっぱりシュウタだな』

『それどういう意味？』

『気にするな。おやすみシュウタ』

『ああ、おやすみ』

「みんな、おやすみ～」

「「「「「おやすみ（なさい）」」」」」

明日は大変そうだな～これじゃまだ国をでれないや。と思いながら眠りについた。

１４話　仲間と秘密（前書き）

勉強なくなってほしいと、この頃思います。

１４話　仲間と秘密

三城　秀太　視点

「グリーンドラゴンを倒したと言うものをつれて参りました」と兵士さんが言う。

「うむ、通せ」王様が言う。

「ハッ！ではこちらにおこしください」そう言って三人の人たちが入ってきた。

「お久しぶりです。王様、私はアレクス＝カースウェルです」

「おお、おおきくなったのアレクス。奴は元気にしておるか？」

「ええ、あいかわらず剣を振り回しています」

「ふふふ、そうかあいつらしいな。で、そちらの二人は？」

「はい、アレクスの妹のファンです」

「同じくライムです」

「おお、そういえば二人の娘がおると聞いたな」

「ええ、そうです。…王様聞きたいことがあるんです」

「おお、なんじゃ？」

「シュウタとシロと言う名前をご存知ありませんか？」

やめて、言わないでよ。王様空気よんでね？

「ああ、そこに黒髪黒目の奴がシュウタだが…それがどうかしたのか？」…言わないでよ～

「ええ、あの人がグリーンドラゴンを倒したのです」

「「「「「「えええええーーーー！！！！！」」」」」」みんな驚く。

「シュウタ、それは誠か？」

「…間違いありません」…言い逃れできませんよね。

「そうか…まぁ、お主なら何でもありだからな」呆れ顔でこっちを見てくる。

「王様、個人的にシュウタとお話がしたいのですが」

「うむ、わかった…部屋に案内してあげろ」王様はそう言うと執事さんが僕と三人を連れて部屋に案内した。

部屋に入るとアレクスが僕に頭を下げてきた。

「すみません、またご迷惑をかけたようですね」

「いや、いいよ。それよりも王様とどういう接点が？」

「実は僕たちの家は貴族でね、そういう点で王様と知り合っているんだよ」

「貴族だったのか～なんかすごいね」

「それよりもシュウタ、君に渡したいものがある」アレクスがそう言って袋を渡してくる。

袋の中身は金だった。

「これはいったいなんだい？」

「これは、グリーンドラゴンの素材を売ったお金だよ。倒したのは君だし、もらってくれ」

そういってくるが１００金はいくらなんでも多いので、一人２０金ということでわけた。

「あんた、本当に優しいのね。ムカツクくらい」ファンがそう言ってくる。

「ありがとう？」

「褒めてないわよ！…それよりも頼みがあるの」

「なんだい？」

「私を弟子にしてほしいの」

「僕も同じく」

「わ、私も」

「はい？どうしてまた？」

「あんたの強さに惚れたの！だから鍛えてほしいの！」

「でも、ライムちゃんは魔法でしょ？」

「わたしは…その、そばにいたいというか…」顔を赤くして小さく言う。

「ごめん、後半からまったく聞こえなかった」

「僕はあなたを越えたいのです」

「それなら、騎士団や宮廷魔法師になったほうがいいと僕は思うよ」

「…本当は正直に言うと、シュウタ、あんたに恩返しがしたいの」

「恩返し？別にいいよ助けたくて助けただけだし」

「お願い！そうでもしないとこの気持ちがおさまらないの！」

「僕からもお願いします！」

「私からも！」

みんなそう言って頭を下げてくる。

「…わかった。でも一つだけ条件をだすね」

「「「条件？」」」

「僕と試合をして、僕が認めたら弟子にしてあげる」

「「「えーーー！！」」」

「何も勝てとは僕は言ってないよ。認めさせるだけだよ」

「わかったわ。場所はどうするの？」

「そうだね～訓練所を借りようかな～。準備はいいの？」

「ええ、もう私たちはできてるわよ」

「それじゃあいこうか」

訓練所に着いて借りれたのはいいけど、観客多いな…

訓練所を囲むようにして騎士団や魔法騎士団の人たちで多いつくされていた。

「さあ、はじめようかいつでもいいよ？」

「いきます！」

「いくよ！」

「いきます」

アレクスとファンは僕の横から攻めてきた。視界を潰すいい攻撃だ。

「いいねその攻撃」僕はそう言ってバックステップして刀で両方受け止める。

【火よその姿をかえよ、火槍（ファイアランス）】

数本の槍が四方から襲ってきた。僕はそれを避けようとしたら後ろからファンが襲ってきた。

「おっと、危ない」ファンの剣を受け止めたら、次は火槍が上からきた。

それを横に避けてたら後ろからアレクスが横に剣を振ってくる。正面でファンを受け止めているので、懐からサバイバルナイフでアレクスに対応する。

【雷よその姿をかえよ、雷砲（スパークガン）】

雷をまとった砲撃が横から襲い掛かる。かなり早い。

…これはまずいね。本気を出さないと、僕は本気を出して抜け出す。

「すごいや、君たち。俺を本気にさせるなんて」

「コンビネーションだったらAランクの人に負ける自信ありませんから」

「なるほど、さすが兄妹だ。合格だよ」

「「「やったーーー！！」」」

三人ともかなり喜んでいた。…よかったね～

観客からは驚いている人がほとんどだった。だって三人とも強かったもん。

「なんで、三人ともDランクの仕事をしていたんだい？」

「実はギルドのは昨日入ったばっかりだったんですよ」

「えっ？そうだったの？」

「ええ、ですから。最初は他の人たちと一緒に行こうという話になりまして、そのとき、たまたまシュウタさんを見つけたわけです」

「そうだったんだ。でもなんで僕たちを？」

「人が良さそうだったからに決まっているじゃない」ファンが言う。

「へぇ～…でも、僕を変態扱いにしたのに？」

「ッ！あ、あれは間違いよ。シロがご、誤解することを言うから」顔を真っ赤にして否定する。

「ふ～ん。まあいいけど、とりあえず三人ともよろしくね」

「「「よろしく（おねがいします）」」」

こうして、弟子が僕にできました…国を出るときどうしよう

三城　麻衣　視点

「あ～、お兄ちゃんどうするんだろ？」

お兄ちゃんが弟子をつくったのはいいけど…国を出るときはほったらかし！？

いくらなんでもそれはないいよね。お兄ちゃん少しは後先考えてほしいな～。

「麻衣さんは弟子をつくらないのですか？」

「麻衣様どうか私を弟子に！！」

「麻衣さん弟子ではなく恋人に！」

「私は嫁に！！」

ものすごくうんざりしてます。後半は関係ないでしょ！っと突っ込みをしたくなる。

「ふふっ早くどこかにいきなさい。灰になりたくなければ」メープルが笑顔で言う。

「ひぃ～～！！【火炎の魔女】！！みんな逃げろ！！」

ドタバタとみんな逃げていった。

「あらあら、ひどいですわね～【火炎の魔女】だなんて」

「【火炎の魔女】？何それメープル？」

「麻衣は気にしなくていいですわよ？むしろ聞いちゃだめですわよ？」笑顔で攻めてくるのが怖いので聞かないことにした。

部屋に戻ると誰か人がいた。

「誰ですあなたは」メープルが警戒する。

「初めまして、僕は【七神柱（セブンスゴッド）】水柱所属（ウォータネス）　ケイブリッチ＝スワンです。どうぞケイブリッチとおよびください」

「セブンスゴット？なんですかそれは？」

「あら？どうやらお兄さんのほうから聞いていないみたいですね」

「お兄ちゃんが何か関係あるの？」

「ええ、それはもちろん。なんせあの人はこの世界に僕の上司がよんだもんですから」

「どういうことですか？」

「あの時は、お兄さんには話しませんでしたが、実はお兄さんはある人とつながっているんです」

「ある人？それはお兄ちゃんの魔法の力と関係あるの？」

「…ありますね、どこまでつながっているかわかりませんけど」

「お兄ちゃんをどうするの？」

「わかりません。それは上が判断することですので…最悪の場合はお兄さんは殺されるでしょう」

「そこまでしないといけない人物って誰なの？」

「大魔女ローズ＝エルキナスですよ」

「なっ！ほ、本当に実在するんですか？」メープルが慌てる。

「ええ、しますよ。この人は世界の魔物、魔獣をつくりだし世の中に、はなった人です」ケイブリッチが言う。

「それは、ほんとうなんですか！？」私は驚く。

「ええ、なかでも彼女が使う魔法は想像を越えていると言われていますからね」

「あの魔法ですか？」

「あれは僕が見た感じでは未完成と言った感じですね」

「え！？あれで未完成？」

「あくまで僕の見解です。そこまではさすがにわかりません」

「…お兄ちゃんには言わないの？」

「余計な刺激を与えるなっと上に言われているので、今回は麻衣さんにと言うことです」
「私がお兄ちゃんに言うかもよ？」
「ご自由にっと言いたいところですがこれは他言無用と言うことでお願いします」
「それは、わたしもですか？」メープルが言う。
「もちろんですよ【火炎の魔女】さん」
「ッ！どうしてその名前を」
「情報はいくらでもありますよ。それでは僕はこれで失礼します」
「【束縛】」私は魔法を放つ。
バチャっと音をたてて水だけだった。…逃げられちゃった。
「どうやら、やっかいごとにシュウタは巻き込まれたようですね」メープルは言う。
「うん、私はお兄ちゃんを支えないといけないね」
「私も協力します」
「ありがとうメープル」
「お互い様ですよ。シュウタを助けたいのですから」

こうして、お兄ちゃんの秘密を知ってしまったがこれからどうなるんだろう？

１４話　仲間と秘密（後書き）

王様とアレクスの名前が似ていることに気付きました。

15話　思わぬできごと

???視点

「報告は？」

「現在は、覚醒した様子はないとのことです」

「わかった。引き続き調査を頼む」

「承知しました」

そう言って女の人が部屋から出る。

「…では会議を始めようか」

「やはり、あいつは殺すべきです」

「やめろ、そんなことをしたらまたいつ来るか分からんぞ」

「しかし、あいつは中に化け物をかっているんですよ？」

「だが大魔女とコンタクトがとれたのは奴が最初だ」

「まだ三人目ですよ！？そう急がなくても」

「静粛に」

しーんっと静まる。

「私はまだ様子を見ていたほうが良いと思うぞ？」

「それもそうですね。中の化け物についてもまだ詳しくはわかりま

せんし」
「あいつのファーストコンタクトは誰にする？」
「俺がいきます」
「レッドお前が行くのか？最初はやめとけ」
「ダメだお前は後先を考えない」
「私も反対だ」
「僕も君の性格を考えてダメだと思うよ？」
「反対が多数で否決だな」
「そ、そんな俺だってやればできるんだぜ！？」
「黙れ、低脳単細胞、お前のせいで今までの二人が死んだんだぞ！」
「そ、それは俺のせいじゃなくて、魔物のせいで…って単細胞は余計だろ！！」
「ほぉー、なら低脳君？あくまで君のせいではないと？」
「えっと…まぁそういうこと？」
「議長コイツは代えるべきです。本当にいりません」
「まてまて！俺だって真剣に「静粛に」ッ！」
「お前はいつまでたっても成長が見られんな…代えたほうがいいか？」

「ま、待ってください、議長！チャンスをください！」

「わかった。そこまで言うなら最後のチャンスだ。…失敗したらわかっているな？」

「承知いたしました！！では私がやってまいります！」

「期待している」

「今回はこれにて終了」

会議が終わりみんなでていく。

「さぁ、君はどこまでくるかな？三城　秀太　君」

静かにそうつぶやいた。

三城　秀太　視点

「起きて、おき…シュウタ」

誰？僕をよぶのは黒髪のロングヘアの女性のシルエットが見えた。

「お母さん？」

「残念、あなたのお母さんではないわ」

「えっ？…ローズ！？」

「しっ、声が大きいわよ」

「ごめん、どうしてここにいるの？」

そう、ここはシュウタの部屋であった。どう考えてもおかしい。

「実はあなたのブレスレットからきたの」

「えっ？ああ、本当だブレスレットがないや。でも、来れるならもっと早く来ればよかったのに」

「ごめんなさい、実はさっきできるようになって、これはあなたの【魔力】を通して来ているの。だからあなたしか見えないのよ」

「へぇー、それならいつでも出てこれるっていうこと？」

「そういうこと、だからいつでもあなたの傍にいれるわ」嬉しそうに微笑む。

「でも、あなたにふれられないことが悲しいわね」

「いつかはふれられるようになるんじゃないの？」

「そうよね、シュウタの言うとおりだわ。これからもよろしくね？」

「こちらこそ、よろしく」

「じゃあ、またね」ローズはそういうと消えていった。

『ご主人さっきから何をぶつぶついっておるのだ？』

『いや、なんでもないよ。ごめんね起こしちゃって』

『気にするな、でも無茶はしないほしい』

『ああ、ありがとう。おやすみシロ』

『おやすみ、シュウタ』

とりあえず、国を出るのは明日だな。カースウェル兄妹はどうしよう？今日聞いてみようかな。僕はそう思いながら寝た。

「お兄ちゃん、今日は訓練所で修行じゃなかったの？」

「…ああ、そうだったね」

「早く起きたほうがいいよ～。みんな待っているんじゃない？」

「今、何時？」

「正確にはわからないけどお昼前だよ？」

「…しまった！」

僕はそう言ってあわてて準備をして訓練所に向かった。

訓練所に着くと、魔法騎士団に混ざって三人とも訓練をしていた。
「あ～！！やっと来たわね！遅すぎよ！！」ファンはかなり剣幕な様子だった。
「いや～ごめんね、寝坊しちゃってさ～」
「寝坊するな！あんたが午前中にやるっていったんでしょ！！」
「…今も午前中だよね？」
そう反論したがおもいっきり殴られた。…すいませんでした。
「え～っといきなりですが、今日で免許皆伝です」
「「「えーーー！！！」」」
「まだ何も教わってないわよ！！」
「いきなりどうしたんです！？」
「シュウタお兄ちゃん…」
「実は明日から僕は旅にでるんだよ」
「「「・・・」」」
「いくらなんでも急すぎるでしょ！」ファンが言う。
「これは、結構前から決まっていることなんだよ」
「いつ決めたんです？」アレクスが真剣に言ってくる。

「えっと…昨日！」

アレクスが殴ってきたので避けた…二度目はくらわないよ？

「シュウタさん結構前という言葉はご存知ですよね？」笑顔で言ってくるが青筋浮かんでいるよ？

「もちろんだよ。…そんなことより、君たちはどうする？ついて来る？」

「…考えさしてください。あまりにも急すぎて準備が…」

「わかったよ。期限は明日の朝までだから、みんなよく考えてね？」

「…わたしは行く！」ファンが言う。

「…明日まで考えていいんだよ？」

「どうせ、置いて行くつもりだったんでしょ？」

鋭いね～。女の勘ってやつかな～？めっちゃ置いて行く気満々でしたよ～。

「本当ですかそれは！？」アレクスが言う。

「…正解だね」

「あ、あなたって人は…」めっちゃ呆れあれた。

「この旅はね危険を伴うんだ。だから、ここで迷っていたら、いざという時にだめだからね」

「試したの？」ライムちゃんが首を傾げて言う。

「そういうことだよ。…でも本当に危険だからね。親と相談して明日言いに来て」

「…逃げたりしないでしょうね？」

「逃げないよ」…ごめん逃げます

「まあ、逃げても地の果てまで追いかけて、半殺しにするから」…前言撤回しま～す。

「大丈夫だよ。心配しないでも待っているから」

「ふ、ふん！わ、分かっているならいいわよ」何故か顔を赤くしながら言う。…ツンデレ？

「まあ、とりあえず、午後からはじめようか」

「結局、午後になるわけね…」ファンが呆れながら言う。

「とりあえず、ご飯にしよう。みんなついて来て～」

「あれが、持ち味ね」

「マイペースって言うんじゃない？」

「私より子供かも…」

こうして秀太と三人は食堂に向かった。

三城　麻衣　視点

とりあえず、【七神柱（セブンスゴッド）】についてはわからなかった。

ほとんどは聞いたことない。暗躍組織とおもうがつかめない。末端の組織があると思うけどそれらしき様子はない。

ものすごく、頭のいい人がまとめていると思う。お兄ちゃんもやっかいな人に目をつけられたね。

とりあえず、城の中には怪しい人はいないし、どうやってお兄ちゃんの様子をみているんだろう。

「麻衣さっきから何を思いつめているのですか？」メープルが聞いてくる。

「昨日のことだよ。あのことがどうも気になって…」

「気にしてもしかたありませんよ。わたしの方でも調べているんですが、手がかりがなくて」

「うん、私の方でも見つからないし、お兄ちゃんから目を離せないね」

「今は食堂のほうにいらっしゃるとのことです。城総出で見張りに

あててますからね」
「それならいいけど…あまり派手なことはやってほしくないな～」
バンッといきなり扉が開いた。
「た、たた、大変です！！」メディアがあわてて入ってくる。
「メディアノックは「レイ様が何者かに連れ去られました」えっ！！」
「どういうこと？」
「それが、シャルさんを襲って堂々とさらっていきました！！」
「シャルは大丈夫なの？」
「気絶しているとのことです」
「メディア落ち着いて…興奮したら敬語なんだね？」
「あっ！いやこれは…癖で…」恥ずかしそうに顔を伏せる。
「落ち着いた？それで手がかりは？」
「あっ、うん手紙が置いてあって内容が」
「“ヴォイレス火山でシュウタを待つ”だそうよ？」
【七神柱（セブンスゴッド）】と私は瞬間的に思った。

15話　思わぬできごと（後書き）

もしかしたら、水曜まで掲載できないかもしれません
勝手な都合で申し訳ありません

１６話　火山までの道のり（前書き）

すみません、遅くなりました。

16話　火山までの道のり

三城　秀太　視点

「えっ！？レイが連れ去られた！？」

「はい、今全力で捜索部隊を編成しております。」兵士さんが言う。実は今、騎士団は王国内に現れたドラゴンの討伐に行っているためいない。いるのは魔法騎士団だけなのだ。

「そうなんだ、どこに連れ去られたか検討はつくの？」

「実はこのようなものがありまして…」

紙切れみたいなものに“ヴォイレス火山でシュウタを待つ”と書いてあった。

これは、【七神柱（セブンスゴッド）】に関係がありそうだな。

「わかった。僕も行くよ準備はできているの？」

「はい、もう少ししたら完了いたします。作戦や詳細は行き先に向かいながらとのことです」

「わかった。すぐこっちも準備するよ」

「それとこのことですが、カースウェル家のみなさんご内密にお願いいたします」

「わかりました」アレクスが答える。
「それでは、失礼します」
兵士さんはそう言って、食堂を出て行った。
「ねぇ、私たちはついていけないの？」ファンが聞いてくる。
「ダメだよ。捜索隊に組まれていなかったら迷惑をかけるだけだよ」
「でも！レイは親友で…」
「ダメだよファン、シュウタさんの言うとおりだ。迷惑をかけたらいけないよ。今回はやめておこう」
「…わかったわよ」俯きながら言う。
「じゃあ、僕は準備があるからこれで失礼するよ」
「はい気をつけてください」
「絶対助けてきなさい！！」
「シュウタお兄ちゃん絶対レイお姉ちゃんを助けてね！」
「ああ、絶対助けてくるよ」
僕はそう言って食堂を出た。
とりあえず、部屋に戻って、シロを連れて城の外に向かった。

城の外にはシャルと麻衣とメープルがいた。…かなり辛そうな表情をしていた。

「もうみんな来ていたんだ」

「遅い！何をしていた！早く行くぞ！」シャルが切羽詰った感じでいった。

「シャル少しは落ち着いてください」メープルが言う。

「いいからいくぞ！！一刻も早くレイ様を助けなければ！！」

メープルは首を横に振って、シャルの頬を引っ叩いた。

パンっと音が響いた。

「ッ！何をする！」シャルがメープルを睨む。

「少しは落ち着いてと言ってるじゃない！冷静さを欠いた状態ではまともな判断ができないわよ？」

初めて敬語を使っていないメープルを見た。とても迫力があって周りの兵士たちは引いている。

「…すまないメープル落ち着いたよ」

「それでいいんです」笑顔でメープルは言う。

「では、改めて出発としよう」

こうして、ヴォイレス火山に向かうことになった。

三城　麻衣　視点

「ねぇシャル、ヴォイレス火山ってどこにあるの？」

「ここから、一日歩いたところにある」シャルが答える。

「敵はどうやって逃げたの？」

「ドラゴンを使って逃げたよ…おそろしく大きかった。まあ、私を襲ったものはかなり強かったからな」シャルは苦い顔で答える。

「やっぱり、ドラゴンを使ってくるかな？」

「わからない、たぶん使ってくるとは思うが…問題はないと思う。なんせ【火炎の魔女】様がいるからな」シャルが笑いながらいう。

「シャル！！そんな不名誉な二つ名でよばないでください！」メープルが怒りながらいう。

「名前には由来があるんだよ。メープルは、し「何でもありません！！それ以上言うと燃やしますわよ？」おっと」

こんな感じでずーっと二人はケンカ？している。とても仲が良くみえる。隊の雰囲気もかなりいい。

「二人は姉妹みたいだね？」

「「絶対にない（です）」」二人そろっていった。

「とりあえず今日はここにテントを張ろう」そうシャルが言う。

だいぶ歩いて来た。明日の夜明け前にここをでて、朝には火山に着く予定だ。

みんなテントを張ったり、食事の準備をしたりなど、いろいろ大変である。

「できたました～」料理をしていた兵士さんがそういうと、みんなが順番に並ぶ。

みんな、好きな場所に座って、騒いだり、談笑したりする。

「いいね、雰囲気がよくて」お兄ちゃんが言う。

「ああ、こんな感じのほうが気を張らなくていいだろ？」シャルが言う。

「そうだね。…そういえばシャルとメープルってどんな関係なの？」

「…元冒険者だ」

「冒険者？いろんなところをまわっていたの？」お兄ちゃんが言う。

「ああ、二人でいろんな所に行ったよ。あの時のメープルは・・・いや、なんでもない」メープルの微笑でシャルの顔が引き攣ってい

た。

「冒険者か～なんかいいな～」私は本当にそう思った。

「基本、自由だから好きな場所、好きな時間、何も縛られずいけるからな」シャルがうれしそうに答える。

「でも、何で城に着いたの？」お兄ちゃんが言う。

「それはですね、シャルがレイ様に助けられたからですよ」メープルが答える。

「えっ？どうやって助けられたの？」

「ああ、それはな商人とお金のことで揉めていたんだ。あとあと知ったんだが、その人は奴隷商人だったんだ」

「またなんでそんなことを？」

「ある店のものを不意に壊してしまってな。弁償代が５０金とか言ってきたんだ」

「…災難だね」

「払えなかったら体で払えって言ってきたからどうしようもなくて…そんなときにレイ様が現れたんだ」

「レイ様はポンっと５０金をおいて、私にこう言ったんだ」

「“大丈夫です。私はあなたの味方ですよ？”って言ってきたんだ」

「すごいな～レイは」

「私は見知らぬ他人なのにどうしてここまでするのか？と聞いたら、“目の前で困っている人を助けてはいけないのですか？”と言ったんだ」

「私はこの人は女神様？って思ったよ。たいていの貴族や王族は自分のことしか考えないで他人なんか普通無視だな」

「だが、レイ様は違った。どんな人でも困った人には手を差し伸べる。…だから、私は決めたんだ。レイ様を守るって」

「…そんな経緯があったんだ」私は感動した。

「…だが今回は守れなかった！それだけが悔しい！」シャルは悔しそうに言う。

「…大丈夫だよ。その気持ちがあれば取り戻せるよ」お兄ちゃんが笑顔で言う。

「そ、そうか。あ、ありがとうなシュウタ」顔を少し赤くしながら言う。…ナイスフォローだけど、罪作りですね～お兄ちゃん。

「…じゃあ今日はもう寝ましょうか」メープルが若干怒りながら、そう言う。

「ああ、そうだな、おい、みんなもう寝ろ～」シャルがそう言うと兵士のみんなは寝る体制になる。

こうして、夜は更けていった。

三城　秀太　視点

夜が明ける前に僕たちは出発した。

朝になると僕たちは火山の麓まできた。

「ここからは、火山特有の魔物が出てくる。みんな注意を怠るな」

「「「はい！」」」兵士たちが声をそろえて言う。

『シロ』僕はそう言いながら近くの岩場に隠れる。

『…なんだシュウタ、せっかく気持ちよく寝ていたのに』少し不機嫌に言ってくる。ちなみにシロは僕の胸の中にいる。

『そろそろ、人間になって』

『わかった』そう言うと胸の中から出てきて、人間になる。火山はかなり道が狭いため大きくなると道を歩けないからだ。

頂上はかなり広いと聞いているが今は無理だろう。

そして、僕はシロに服を渡す。

「…またこれを着るのか」

「お願いだからきて、裸のままでみんなの前にでたら僕がなんていわれるか」

「シュウタがそう言うなら着るが…」しぶしぶ了解して着てくれた。

「それじゃあ、みんな待っているし行こうか」

「…シュウタは裸をみせても反応しないんだな」なぜか不機嫌になっていた。

「あれ？お兄ちゃんシロ連れてきてたの？」

「そうだよ、道が狭いから人間になってもらったけど」

「なんでシロは不機嫌になっているのだ？」

「よく分からないが、裸を見ても反応しないとか」

「…お前はもう少し女心を理解したほうがいいぞ？」シャルが呆れて言う。

「理解ならしてると思うけど？着替えは見ないとか」

「…いや、すまない私が悪かった」なぜか謝られた。

登って、頂上まであと少しのところまできたが、まだ魔物が現れていない。

「どういうことだ？いくらなんでもおかしいぞ」シャルがいう。

「あれ見て！」麻衣が頂上を指して言う。

「なんだ！あの数は！？」頂上付近にたくさんの魔物がいた。

「あれは、まずいね…僕がなんとかするよ」

【あの魔物たちをなかったことにする】

僕はそう言って、魔物たちに向かって魔法をを放つ。一瞬にして魔物たちが消えた。

僕はそのまま、頂上まで行く。

「ははははっ！すごいな報告以上の魔法だよ」赤髪赤目の青年が言う。

「お前がレイをさらった。犯人か？」

「ああ、俺は【七神柱（セブンスゴッド）】火柱隊長（ファイアネス）　ファイルズ＝ビットだ。よろしくな」ファイルズは、にやりと笑った。

１６話　火山までの道のり（後書き）

戦いは次話になります。
テストが金曜まであるので、もしかしたら土曜になるかもしれません。
本当に申し訳ありません。

17話　VS　ファイルズ（前書き）

テストがやっと終わりました～
三人称で頑張ってみました。
もしかしたら、今回から三人称にするかもしれません。

17話　VS　ファイルズ

三城　秀太　視点

ファイルズと名乗った青年の腕の中には、レイがぐったりとした様子でいた。

「…レイに何をした？」

「あはは、そんなに怒るなよ。ただ単に眠っているだけだ。…さあ死合いしようぜ？」

「いくぞ！」秀太はそのまま突っ込んで行く。

「おやおや、特攻とは感心しねぇな」ファイルズは片手をあげる。

「【火槍（ファイアランス）】」何十本の火の槍が秀太を襲う。

「なっ！」秀太は横に飛ぼうとしたが間に合わず数本くらう。

「ぐっ！」秀太は気にせず突っ込む。

「だから、何度もやっても…なに！」ファイルズが後ろを向いたと同時にシロが顔を殴った。ファイルズはそのまま数メートル吹っ飛ぶ。

シロはその間にレイを確保してその場を退く。

「やるじゃねぇかお前ら！！」ファイルズがそう言った瞬間、炎の壁が数十メートルに渡ってあらわれる。

「くそ！逃げ道が！」秀太はそう言う。

「はははは！！無駄無駄！どこにも逃げ道なんてねぇよ！俺が逃がすと思うか？おい、ドラゴン！敵の仲間が来たみたいだから相手をしてやれ」ファイルズはそう言うとドラゴンがファイルズの後ろからでてきて空を飛びながら少しずつ大きくなって壁をこえていった。

「くそ！シロ、君たちだけ外に出す！麻衣たちを手伝ってやってくれ」秀太はそう言ってレイとシロにふれる。

「待て！わたしは――――」シロが何か言う前に魔法を使った。

「ほぉ、それが例の魔法か…てめぇの強さみせてもらうぜ！くらえ！【火砲（ファイアガン）】」直径三メートルの火の弾がものすごいスピードで襲い掛かる。

「【その魔法をなかったことにする】」秀太がそう言うと、跡形もなくなくなった。

「すげぇなおい！」ファイルズは興奮していた。

「【お前の存在をなかったことにする】」秀太は躊躇せずに次の魔法を放つ。

「あ？今何かしたか？」ファイルズは何事もなかったように振舞う。

「なっ！そんなはずは」秀太はかなり驚いた。

「あははは！もしかして、俺を消そうとしたのか？バカだな～くらうわけねぇだろ！【火柱（ファイアポール）】」

目の前に火の柱が地面からいくつも現れて秀太を襲う。

「はっ！」秀太は避けながら、ファイルズに近づく。

「もらった！」秀太はそう言って腰にかけてあった銃をとって撃つ。

直径二メートルのレーザーがファイルズに向かう。

「【火壁（ファイアウォール）】」ファイルズは自分の目の前に火の壁を現させて秀太の攻撃を防いだ。

「これならどうだ！」秀太はレーザーを防いでいる間にファイルズの懐に近づいて刀を振るう。

しかし、それも読んでいたのいたのかひょいっと下にしゃがむ

「【火衝撃（ファイアインパクト）】」ファイルズは秀太の胸に火の手をぶつけてくる。

「がはぁ！」肺の中に入っていた酸素を強制的にだされながら数十メートル先にある壁にぶち当たる。

「げほぁ！がはぁ！」秀太は、血を吐いて立ち上がる。

「いってぇな！」秀太は【冷者（アイス）】になっていた。

「あはは！！やっと本気になったかシュウタ！！これで心おきなく

殺せるぜ！！」

「あ？なんかいったか？」秀太はいつの間にかファイルズの後ろにまわりこんでいた。

「なんだっぐぼっ！」ファイルズはそのまま殴られ上に吹っ飛ぶ。

「まだいくぜ？」秀太はそのままファイルズにおいついて刀でそのまま腹を斬る。

「あぶねぇなおい！！」ファイルズは、刀を素手で掴んで炎を出す。

「ぐっ！」炎は刀の柄まで秀太は熱くて思わず手を離した。そして、二人は地面に着地して対峙する。

「いいね～！今の攻撃。ちょっと腹が切れたぜ！」狂気に満ちた笑顔で言う。

「おいおい、何笑ってんだよ。…もしかしてマゾ？」

「コロス」静かにそういって詠唱なしで【火槍（ファイアランス）】を放ってくる。

「【その魔法をなかったことにする】」

秀太は急いで刀を拾おうとするが火の壁に阻まれる。

「おい、どこをみてんだ？」ファイルズがいきなり横から現れた。

「ちっ！」秀太は舌打ちをして、銃で攻撃しようとする。

「おせぇよ！」ファイルズは秀太の手を掴む。

「燃えろ！」そのまま秀太の手を燃やした。

「ぐああ！！」秀太は苦悶の表情を浮かべるがなんとか耐えてファイルズと距離をとる。

クソが！蜃気楼かよ。秀太は心の中で毒づいた。

「【ケガをなかったことにする】」秀太はケガをすべてなかったことにした。

「…終わった？」ファイルズは、にやにやしながらこちらを見てくる。

「ああ、そうだな」秀太はそのままながした。

「いいねぇクールすぎて、でもあと何回もつかな？」

「何回でももつけど、生憎、俺はお前と違ってマゾではないんでね」

「あはは！！そんなに殺してほしいのかよ！！」ファイルズは襲い掛かってくる。

秀太は銃を取り出して構える。

「あはは、そのままかよ！！つまんねぇな！！」ファイルズは手の中に炎を作りだしそれを秀太に向かって放つ。

「なにっ！？」しかし、秀太には当たったが偽者だった。

「こっちだよ」秀太はそのまま銃を撃った。

「ぐあああ！！」ファイルズの肩に貫通する。

「くっ！…な、なぜだ？」ファイルズが苦しそうに言う。

「あ？お前の分身をつくりだしただけだが？」

秀太は空気中の水を魔法で自分の分身をつくりだしたのだ。これなら秀太の【魔力】はそんなに減らない。

「あはは、ヒャヒャヒャアアアアアアァァァ！！！！」ファイルズが突然狂うように笑い出した。

秀太はものすごく不快な表情を浮かべていた。

「ありがたく思えシュウタ俺が本気で相手をしてやるよ！！」

「【解放(リベレル)】」ファイルズがそう言うとドンっとファイルズから火の柱が飛び出して、背中から二本の真っ赤な翼が生える。

「なんだあれ！？」秀太は本能的に動いた。あれはマズイ今すぐにやらないと秀太はそう思った。

「【一回だけ銃の強さを四倍にする】」そう言うと同時に銃を撃った。

直径10メートルのレーザーがファイルズを襲う。

ドッパンっと音が聞こえたとおもったらレーザーが弾かれた。

「冗談だろ？」

秀太は腕がギリギリ吹っ飛ばない程度の威力を撃ったのだ。吹っ飛ばないが腕の骨はボロボロだ。腕が吹っ飛んだら回復をするのに【魔力】を多く使う

からだ。

「【このケガをなかったことにする】」秀太は魔法をすぐに使った。

ちっ！これでもう無理はできねぇ…どうする？考えろ！秀太は必死に考える。

「あはは、待たせたな！！」ファイルズは火の粉を身に纏、真っ赤な二本の翼が彼の背中から生えていた。

「おいおい、俺は童話の世界でも来たのか？」

「余裕だねぇ！！でもいつまでそうしていられるかな？」ファイルズはいきなり火の槍を数百本出してきて攻撃する。

冗談だろ！？これをどうやって避ければいいんだよ！！秀太は内心かなり焦っていた。策がない。何もない。

恐怖？ないな。でも、いつ以来だ？こんなに追い詰められたのは？楽しい？ああ、そうか――――

ドンっと音が響いた。秀太を火の槍が襲った。

三城　麻衣　視点

「なに？この火の壁は！？」高さは５メートルはあるだろう。しかもその壁を越えて何かがやってきた。

「おい、あれはレッドドラゴンじゃないか！」シャルが驚きながら言う。

大きさは５０メートルで全身が赤い鱗に覆われた竜がこちらに向かってきた。

「戦闘態勢！魔法は複数で行うぞ！」シャルが指示をだす。

麻衣はドラゴンを見つめていたがこちらに向かって誰かが走ってくる。

「シロ！そしてレイ！？」シロはレイを抱えてこちらまで走ってきた。

「シロ！無事だったの？」

「ああ、しかしそれよりも！シュウタが今危ない！」

「えっ！？お兄ちゃんがどうかしたの？」

「レイを攫った奴と戦っている。私も行かないと！」

「待って！どうやってあそこに行くの？」

「無論大きくなって「待って待って！！それじゃここが崩れちゃうよ！！」むっ！しかし！！」

「今はこっちを手伝って！！こっちが終わったら向こうに行く方法を考えよう！！」

「わかった！…しかし、空を飛んでいるのはいかんな」シロはそう言って空にいるドラゴンを見る。

「大丈夫私の魔法を使えば、【束縛】」そう麻衣が言うとドラゴンはカチンっと急に動きを止めて地面に落ちてくる。

「【浮遊】」麻衣は地面に着くすれすれで使った。

「あとはこれで倒すだけっと」麻衣は満足げに頷く。

「…むちゃくちゃだな麻衣も」シロは呆れながら言う。

「うん！ありがとう」麻衣は照れながら言う。

「…褒めていないがまぁいいか」シロはそう言ってドラゴンの方に走っていった。

「とりあえず。レイに異常がないか調べないと」麻衣はレイを魔法で異常がないか調べた。

「薬を飲まされているみたいだね【回復】」そう言って魔法をかけ

る。

「うっ…あれ？ここはどこですか？」レイが寝ぼけながら言う。

「ここはヴォイレス火山だよ？レイ、あなたはここまで攫われたんだよ？」

「あ！そうでした。麻衣助けてくれてありがとうございます！」

「いや、私じゃなくてお兄ちゃんとシロが助けてくれたんだよ？」

「そうなんですか！？シロとシュウタはどこに？」

「シロは今ドラゴンを倒しているところだけど、お兄ちゃんは…レイを攫った人と戦っているよ。ほらあそこの火の壁の向こうで」

「早く助けないと！！シュウタが！」悲痛な表情で麻衣に言う。

「うん、もちろん！だから早くあの火の壁を調べないと」

「麻衣！こっちはおわったぞ！レイ様！良くご無事で私が不甲斐ないばかりに！」シャルが目に涙を浮かべながら言う。

「いえ、いいのですシャル。それよりも今はシュウタを！！」

「うん！」麻衣は頷いて、火の壁まで近づいて調べる。

「これは…ちょっと時間かかりそうかな～」麻衣はそう言う。

この火の壁は一つ一つがつなぎ合わせられていて、一つだけ破壊し

ても復活するという厄介な魔法だった。

「なんとかならないのか？」シロが言う。

「大丈夫！やってみるよ」麻衣はそう言うとあちこち動いてスイッチ式の【解除】の魔法をかけた。

「よし！いくよ！」麻衣はそう言うと魔法を放った。

そしたら、炎の壁が消え去った。

「よし、全軍！シュウタの援護をしろ」シャルがそう指示をした。

三城　秀太　視点

「あはははは！！死んだぞ！あっけないな！！」ファイルズは笑い声をあげる。

「そ、そんな！シュウターーー！！！！」シロが叫ぶ。

「次はお前たちの――――」

ザンっといきなりファイルズの右腕が斬られた。

「ぐあああぁぁ！！」ファイルズが声をあげる。

「誰が死んだ？お前か？いや、お前は今から死ぬな。いや、もう少しだけもう少しだけ」秀太がファイルズの右腕を刀で刺しながらぶ

つぶつ言っていた。

「てめぇ！！ふざけやがって！殺しっ――ぎゃあああぁぁ！！」次は左腕を斬られた。

「コロス？いや、苦しめる。楽しむ」秀太は恍惚な表情を浮かべてファイルズを攻撃する。

左足、右足と次々に奪っていく。

「終わり？いや、もう一回」秀太は魔法を使ってファイルズの手足を復元させる。

「な、何をした！？なぜ！？」ファイルズはもう力が残っていないのか

「もう一回、もう一回」秀太はぶつぶついいながらファイルズに近づく。

「や、やめろ！やめてくれ！！もうやめてくれ助けてくれ！！」ファイルズは恐怖で顔を真っ青に染めていた。

「消す。いや、苦しめる。楽しむ」秀太は右腕をまた斬り落とした。

「ぐあああぁぁ！！」ファイルズは苦悶の表情を浮かべて叫んだ。

「あはあはははは！！面白い！！面白すぎる！！」秀太はすべてを解放した気分でいた。こんなに最高なら最初から――

「お兄ちゃん！？いったい何があったの！？」秀太は声が聞こえる

方を向いた。麻衣が悲痛な表情を浮かべていた。そして隣を見ると

「うっ…ひっく！シュウタ…もう…いいから！」シロが泣いていた。

秀太は自分の中にあるものが急速に冷めていった。

「おい」秀太は言う。

「ひっ！」ファイルズは声をあげる。

「二度とこんな真似をするなしたら、次は容赦しねぇ」

「わ、わかりました。次か―――」ぼとっとファイルズの首が地面に落ちた。

「あ？」秀太は上を向く。

「次はないよ。役立たず君」空中に浮かんでいる緑髪緑目の少年が言う。

「誰だ？てめぇは？」秀太は睨みつけながら言う。

「ああ、それはまたのお楽しみ。それでは」にこにこしながら消えていった。

「やっと、おわった…か」ばたっと秀太は倒れた。

18話　真実

三城　秀太　視点

――あれ？僕はどうなったんだっけ？

秀太はそう思いながら周りを見渡す。

『秀太、気がつきましたか？』ローズが秀太に声をかけてくる。

――ああ、ここは【狭間】なんだね。

『そうよ。そして、あなたに話したいことがあるの』ローズはそう言って秀太を真剣に見つめる。

――なんだい？話したいことって

『それは、あなたの中にあるものについてよ』

――僕の中にあるもの？もしかして【戦者（ファイズ）】に関係ある？

『そうよ、人格変化についてなんだけど…実はね、秀太の中には【神の力】があるの』

――【神の力】？

『【神の力】は人間にはコントロールなんてできないわ。だから、秀太には枷があるの』

――枷？それはいったいどんなもの？

『…感情をある程度なくしたの』

――感情をなくす？どういうこと？

『人並みの感情を失うことで、一般の人よりも感情が薄いの』

――そうなんだ。それはやっぱり5歳のときからなの？

『そうよ、その力が発覚して、押さえ込んだの』

――なんでローズがそんなことを知っているの？

『私はもともと、向こうの世界の住人なの』

――えっ？そうなの？

『ええ、昔の話になるんだけど、私はこの世界にきたのは日本で言う昭和初期の時代なの』

――そうだったんだ。でもどうやって元の世界にもどったの？

『力の半分を失う条件で戻れたの。でもね失敗する可能性もあったのよ』

――でもなんでそんな賭けを？

『追われていたの。私の力のほしさに。私は疲れていたのだからね死んでもいいやって言う気持ちになっていたのよ』

――そこまで追い詰められていたなんて…一体誰に追われていたの？

『【七神柱（セブンスゴッド）】よ。』

――またあの連中か。でも地球にもどったんだよね

『ええ、私がもどった時には平成の時代になっていたのよ。そして、私は転移のせいで力尽きてその場に倒れたの。そして、目が覚めたらあなたのお母さんがいたわ。なんでも私は秀太の家の前で倒れていたのよ』

――すごいね。奇跡なんだね。

『ええ、私はよく平成の世の中についてよくわからなかったし。落ち着くまでここで暮らしていいよって言ってくれたの。でもね、私が来て二年後事件が起きたの』

――事件？

『ええ、あなたが暴走したのよ。』

――【戦者（ファイズ）】にでもなったの？

『いいえ。神の力を出したのよ。制御しきれない感じで危ない状態だったの。だから私が押さえ込んだのすべての力を使って』

――ごめんね。ローズ。

『いいのよ。私はやりたくてやったんだから。それにねこれで借り

は少しは返せたかなって思ったの』

――そうなんだ。ありがとうね。僕を守ってくれて。

『どういたしまして。でもね、お別れの時がきたのよ』

――お別れ？そういえばなんでローズは捕まったの？

『実は召喚魔法で私をまたここに召喚されたの』

――えっ？いったい誰に？

『【七神柱（セブンスゴッド）】よ。私の力の半分を使ってね』

――力の半分は失ったはずじゃなかったの？

『地球に戻るときに使った力はどうやらここの世界に残っていたらしいの。だからリーダーがその力の半分を受け継いで私を呼んだの』

――どうしてそんなことを？

『私の力のもう半分を手に入れるためよ』

――そんなことのために？ローズを？

『そうよ。だからね私は抵抗したんだけど、そのとき私は力がなくてね捕まったの』

――僕のせいなんだね…

『そんな悲しい表情をしないで決して秀太のせいではないわ』

――うれしいよそんなことを言ってくれるなんて。それと、やっと僕の名前をちゃんと正しい発音してくれたね。

『同じ日本人だからね。ごめんねこんなことになちゃって』ローズは悲しそうに言う。

――いいよ。そしてもうひとつ目標もできた。

『目標？』

――ローズを絶対助けること。それに本当の名前も知りたいしね。

『いいのよ私のことは、それに本当の名前を教えると枷がはずれるわ』ローズが驚くことを唐突に言う。

――ありゃ～そうなんだ。そしたら力の制御の修行もしないといけないね。

『そうね。その力は制御しないといけないけど…できるの？』

――僕には頼もしいローズって言う師匠がいるからね。

『くすっそうなんだ。これからもいろいろとよろしくね』

――よろしくローズ

『当面の目標だけど、あなたをまた狙ってくる可能性があるわ。あまり長居はしないほうがいいと思うわ』

――ああ、僕もそう思っていたんだよ。しかもあんなことがあったんだし、僕なんていないほうがいいよ。

『…秀太がどう思っているか知らないけど、ちゃんと考えて行動してね？』

――わかってるよ。それじゃ行こうかね～。

『またね、秀太』

秀太はそのまま意識を手放した。

「おはようでいいのかな？」

秀太は起き上がって周りを見渡す。どうやら自分の部屋のようだ。

「すぅー…お兄ちゃん…」

麻衣がベットに頭を預けて眠っている。どうやら看病してくれていたみたいだ。

「…行くか」

秀太は服を着替えて黒の軽装備、刀、銃、お金とローブを羽織る。そして一枚の手紙を書いて机の上において別れを告げる。

「みんな、いままでありがとう。でも僕は行かなくちゃ。あいつらを倒して、戻る方法を――」

ガチャンっと扉が開いた。

「秀太？…何をしているんです？」レイは不思議そうにこちらを見ていた。

「おっと、タイミングを間違えたみたいだね…レイありがとう。そして、さようなら」

「えっ？秀太？」何を言っているか分からないという状態のレイを見ながら秀太は瞬間移動を使った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8541w/

勇者の妹と温和な兄

2011年10月10日01時49分発行